案山子
二〇二四　冬

新潟大学文芸部

目次

案山子二〇二四　冬

案山子二〇二四　冬 …… 3

目次

目次 …… 5

二〇二四冬　お題作品『告』

二〇二四冬　お題作品『告』 …… 7

虚空白／星屑なつき

虚空白／星屑なつき …… 9

残響／今泉とびら

残響／今泉とびら …… 25

世界破壊衝動／青空

世界破壊衝動／青空 …… 32

羨望／池田優太郎

羨望／池田優太郎 …… 43

堕胎告知／和槻泉

堕胎告知／和槻泉 …… 47

チョコレートの告白／大木田悠琢

チョコレートの告白／大木田悠琢 …… 60

ひとり／杉崎環生

ひとり/杉崎環生 …… 77

松に鶴、梅に鶯、その先も/桧

松に鶴、梅に鶯、その先も/桧 …… 82

奥付

奥付 …… 92

案山子二〇二四　冬

案山子二〇二四　冬

案山子二〇二四　冬

目次

目次

目次

二〇二四冬　お題作品『告』

二〇二四冬　お題作品『告』

虚空白　星屑なつき
残響　今泉とびら
世界破壊衝動　青空
羨望　池田優太郎
堕胎告知　和槻泉
チョコレートの告白　大木田悠琢
ひとり　杉崎環生
松に鶴、梅に鶯、その先も　桧

虚空白/星屑なつき

虚空白/星屑なつき

虚空白

彼が、いなくなった。
五年だ。大学から付き合い始めて五年も連れ添った彼氏が、たったの三十分でいなくなった。
『司が作る生チョコ好きなんだよ。デパ地下の洋酒チョコと並ぶくらい好き』
『今年も楽しみにしてる』
バレンタインを控えた二月の頭、最後のメッセージは『楽しみ』の文字と共に踊り狂うゆるキャラのスタンプで終わっている。
そのメッセージの三十分後には、彼がうちに来て、チョコレートなんてメじゃないくらいの甘い甘い夜を過ごすはずだった。
「あれ、もう二十時過ぎてるじゃん」
いつも、約束の時間の五分前には目的地に着いていた{学斗⊠まなと}。掃除が済んでいないからと玄関から締め出したのも、一回や二回のことではない。
それが、約束の時間に三十分も遅刻している。異常事態と言って差し支えない。
「学斗史上初遅刻か……焼き肉でも奢ってもらおうかな」
そんなことを呑気に考えながら、メッセージアプリでしつこくスタンプを連打する。
返信はおろか、既読もつかない。
「え、もしかして俺、忘れられてる？」
遅刻どころか、約束したこと自体を忘れてしまったのだろうか。
メッセージアプリの無料電話と携帯会社の電話機能の両方を駆使し、何度も電話をかける。抵抗虚しく、一人きりの六畳半にコール音だけが響く。
「寝落ち……かもしれないよね」
外でもない自分に聞かせるための独り言。「そうだね」なんて答えてくれる存在はこの部屋には居ない。
そうこうしているうちに時計の針は頂点を超え、呑気な思考も締め出さざるを得なくなってきた。
これが他の人ならいざ知らず、相手は学斗だ。超がつくほど真面目で、連絡は必ず二時間以内に返すマメ人間。それだけじゃない。学斗は、普通の人間とちょっと違うのだ。
「具合悪くて倒れてるとかじゃないよね……？」
嫌な予感が頭を過る。
最初、学斗と出会ったときのことが生々しく蘇った。頭の中で映し出されるのは、部室棟の床に倒れている学斗の横顔。真っ先に口から出たのは「大丈夫ですか」でも「どうしたんですか」でもなく、「綺

麗だ」だった。
また、あのときみたいに倒れていたら。
そう考えるだけで恐ろしくて、俺はたまらずに学斗のマンションを目指して駆け出した。

「はぁ。それで、自宅には彼氏さんは不在。共通の友人はいないし、彼氏さんの親の連絡先も知らない……」
紅茶を一口、メガネの奥の目が細くなる。
「親御さんとは関係が悪いとかで、半分絶縁みたいな状態なんだって言ってました」
「ふぅん」
可愛らしい皿に載ったクッキーを惜しげもなくボリボリと食べているのは、同じ鴨川出版で推理小説を出している才川先生。僕と同じ二十五歳、若くて美しい可憐な女性にも関わらず残忍な殺害と狂気的な犯行動機が「ギャップ萌え」と話題の作家だ。
「それが二月初頭の話で、今はもう二月下旬。ここまで何の進展も無く完全に手詰まりになってしまったから、推理作家・才川水木の推理力を貸してほしい……と、こういうことだ」
「はい。ぜひお願いしたく」
半分嘘だ。担当編集さんにこんな私事を相談する気にはなれないし、大学在学中に新人文学賞をポッと受賞してからは、友達もいない。親には、同性と付き合っているということが言い出せなくて、学斗の存在すら知らせていないから論外。出版社主催のイベントでたまたま連絡先を交換した才川先生くらいしか、相談できる相手がいなかった……というのが本当のところだ。
「そうだなぁ……」
悩んでいるような顔をしながらもスマートに片手を挙げ、駆け寄ってきた店員さんに紅茶のおかわりを頼む。俺が数えているだけでもこれで三ポット目だ。どれだけカフェインを摂るつもりなのだろうか。
「まず言いたいことは、『情報が足りない』ということかな」
才川先生曰く、学斗本人のステータスについてもっと知らなければ、推理のスタートラインにも立つことが出来ないのだと言う。考え抜かれた人物設定と緻密な描写が魅力の才川先生らしい視点だ。
「話すべきことがたくさんありすぎて……何からお話しすればよいのか」
「じゃ、馴れ初めから順番に」
恥じらいも無く平坦に告げる才川先生を前に、俺は照れくささを慌てて押し殺す。思えば誰かに、学斗とのことを詳しく話すのは初めてかもしれない。
俺は、きっかり五年前から今日までの記憶を脳の奥から引きずり出した。

学斗と出会ったのは、冬休み直前のことだった。
置きっぱなしにしていた教科書を取りにいくため、大学敷地の隅っこに佇んでいる部室棟へ足を運んだ。活動日ですら人の集まりが悪い文芸部のことだから、平時に他の部員が居るはずもない。誰も居ない部室から教科書を引き揚げ、さっさと帰ろうとしていたその時のことだった。
「あ、どうも」
隣の演劇部室から出てきた学斗と目が合った。その当時の俺は演劇部なんて目立ちたがり屋の陽キャ

の巣窟としか思っていなかったので、絡まれる前に退散してしまおうと雑に鍵を締める。
刹那、背後からドサリと嫌な音がした。

「顔色を真っ青にした学斗を、必死で医務室に運んだんです。それが、馴れ初め」
倒れた学斗を見た俺の第一声が「綺麗だ」だったという場面から、才川先生の顔は見るに耐えない歪み方をしている。仕方ないだろう、自分でも制御出来なかったんだから。
「倒れた原因について、彼氏さんは何と？」
「その時は『貧血体質なんだ』とだけ。でも、後々になってから難病だって教えてくれました」
再生不良性貧血。学斗が普通の人間とちょっと違うのは、その厄介な病気のせいだ。
「赤血球が正常に作られない自己免疫疾患……ね、なるほど。それで？」
「後日改めてお礼がしたいってことで、その場で連絡先を交換しました。最初食事に行ってからだんだん仲良くなって、カラオケとか映画とか、互いの家にも行くようになりました」
学斗に対して抱いている感情が恋愛感情に等しいものだと気づいた時、とても戸惑った。ただの親友だとばかり思っていたし、そう思い込むようにしていたから。
「告白はどっちから？」
「学斗からです」
「どんなシチュエーションで？」
それは推理に何か影響がある情報なのだろうか。純度百パーセントの無関心を装っておきながら、この人は結局俺たちの色恋話を聞くことに熱中しているのではなかろうか？
「あのそれって」
「推理に必要なことだから、できるだけ詳細に話して」
「……はい」

学斗が飲んでいる薬は、かなり辛い副作用がある。代表的なのは吐き気や倦怠感だが、それに加えて学斗は時々熱を出した。
その日も、熱を出して寝込んでいるという学斗のところへ俺が押しかけ、一日中付き添って看病していた。
「学斗、学斗。さすがに何か食べなきゃ」
顔を赤くした学斗は毛布を目元まで引き上げ、困ったような目を俺に向けた。
「気持ち悪い？」
俯くように頷いた学斗があまりに辛そうで、俺は思わずその頭を撫でた。汗で張り付いた前髪をのけてやると、これでもかというほど潤んだ瞳と目が合う。
「つかさ……」
「どうした？　どっか辛い？」
「んーん」
そう言って柔らかく笑う顔が、少し低くなって掠れている声が、毛布を握る指さえも、全部が愛おしい。

「幸せだなぁって」
難病に身体を蝕まれ、治療薬の副作用に苦しんでいるのに「幸せ」と言えてしまうその人が、儚くて大好きで、俺は胸が詰まって言葉も出ない。
「司、好きだよ」
「……学斗、それは」
「大好き。付き合って」
その時の学斗の顔が赤かったのが熱のためなのか熱情のためなのか、俺には分からない。

五ポット目の紅茶を飲み干した才川先生は頭を抱えて唸っている。
「うぅーん、あぁ。もう、なんなんだ君たちは」
やっぱりこの人、俺たちの恋愛模様を聞いて興奮したかっただけなんじゃないか？
「あの、才川先生」
その態度をとにかくどうにかしてくれと言おうとした時、顔がぱっと上がった。
急に真面目な顔と声になった才川先生は、人指し指をピンと立てて俺をまっすぐ見る。
「捜査方針その一。彼氏さんが通っていた病院へ照会をかけるんだ。どこに通院しているかくらいは知ってるでしょう」
「ええ、学斗本人が言ってました。新徳記念病院だって。でも先生、病院に問い合わせるってのは俺も考えましたけど、個人情報保護とかで教えてもらえないんじゃ……」
才川先生は嘲るように口の端を吊り上げる。
「嘘も方便。『この病院に入院している古崎学斗に着替えを持ってきた』とでも言えばいいじゃないの」
「学斗が入院していればそれで分かるかもしれませんけど……」
「馬鹿だなぁ。入院していなかった場合でも、事務員が何か零すかもしれない。事務員の態度や挙動から読み取れる情報だってある」
まだ納得できない顔の俺に、才川先生は前のめりになって続ける。
「つべこべ言わず、今度の休みにでも行って聞いて来て。それで事務員の返答や挙動を全部私に報告するんだ。良いね？」
一息で言い切った紅茶ジャンキーはその勢いのまま立ち上がり、伝票を手にさっさと出ていってしまった。

他の小説家はそうでもないのかもしれないが、俺はスケジュール管理がとても下手くそだ。だから、原稿がチェックされて返ってくるのを待つだけの限りなく生産性の低い一日というのが定期的に訪れる。
そしてまさに今日、俺の生産性は地に落ちていた。
「おはようございます。今日はどうされましたか？」
よって俺は、新徳記念病院の受付に、場違いなほど気まずい顔で佇んでいるのだ。
「入院している古崎学斗に荷物を届けに来たんですが……」
「どこの病棟とかっていうのはご存知ですか？」

「すみません、ちょっと急なことだったものでそこまで聞けていなくて」
自分でも分かるくらい声が上ずっている。多分というか絶対、俺は役者にはなれない。
「大丈夫ですよ、お調べしますね。こ・ざ・き、まなとさん……でお間違い無いですかね」
俺は赤ベコみたいに首をブンブン振る。事務員さんは一瞬笑って、すぐにパソコンを弄り始めた。
「生年月日、お願いします」
「えっと、俺の一個下だから……平成十三年九月三日ですね」
「はい、えーと……うーん？」
事務員さんは眉を潜め、パソコンに顔を近づける。幼い頃、テレビゲームに没頭していたら「顔が近い！　目が悪くなるよ」と母親に怒られたのを思い出した。
「あの、そのような方は入院されていないというか、カルテが……無くてですね」
「は？」
自分でも恥ずかしくなるくらい間抜けな声。しかし、カルテが無いというのはどういうことなんだろうか。言葉をそのまま咀嚼するなら、受診歴が無いということなのだろうが、それは一体……。
「あ、そう……ですか。えっと、ちょっと確認とってみます。はい」
「お力になれずすみません」
半ば儀式的に眉を下げる事務員さんに礼を言い、気まずさ百パーセントの俺は逃げるように病院を駆け出した。

「んあ？　カルテが無いって？」
俺からの報告を聞いた才川先生は、電話が音割れするほどの大声を出して驚いた。驚きというよりは、何か興奮や好奇に近いようなニュアンスを含んでいる。
「そうなんです。カルテが無いってことは、一度も受診したことが無いってことですよね」
電話口の才川先生は少し考え込むような唸り声を出した後、発作を起こしたように不気味な笑い声を上げ始めた。俺はエスパーでもなんでもないが、おそらく、いや絶対この人はロクなことを考えていない。
「なんですか」
「いや、いやね……ちょっとね。カルテが無いってのは言い過ぎかもしれないけど、『そのような方は入院されていません』という言葉は、単にその人が入院していないということ以上の意味を持つことがあるんだよ」
意味が良く飲み込めずに喉が詰まる俺を見かねて、才川先生は分かりやすくその突飛な思考を説明してくれた。
なんでも、『そのような方は入院されていません』という返答には大きく二つの可能性があるのだという。一つは、本当にその人が入院している記録が無いとき。もう一つは、本人の強い希望によって他人に入院していることを隠しているときだ。今回、後者であった場合、一つの大変おもしろい筋書きが出来上がるらしい。
「それってのがな……まぁ、あれだ。古崎学斗が、君を、非常に……非常に、嫌っていて、ストーカー同然という認識を持っていて、病院に『絶対に井田川司に情報を渡さないでください』と頼み込んでいる

という、ふへへ、へへへっ……」
「そんなわけ！」
俺はほとんど反射的に電話口に怒鳴り声をぶつけた。キィン、と反響音がこちらまで聞こえてくる。
「ごめんごめん。まぁ、今回の場合はほぼ百パーセント前者だと思うよ。本当に古崎学斗は新徳記念病院に入院していなくて、受診歴もない」
「でも……でもですよ才川先生。学斗は必ず二週間に一回、病院に行くと言ってスケジュールを空けてたんですよ。しかも、学斗は体調が悪い日が増えてきて、一昨年からは休職していたんです。俺はその辺のことは素人ですが、病院に行かずになんとかなる状態とは思えなかった」
才川先生は大げさなくらいにため息をついて、「病院に行くとか、休職していると言うだけなら誰でもできる」と言い放つ。
「病院に行くと言っていた彼氏さんは、実は病院なんか行っていなかった。じゃあ、何だ？　その一日、わざわざ君とのデートも断って、何をしていたんだろうな？」
意味ありげな間。
俺だって、腐っても小説家だ。そんな言い方をされれば、すぐに思いつくのはたった一つの可能性。
「他に、恋人がいた？」
自分で言ったのに、胸に重石を詰められたような苦しさを感じる。
才川先生は細く深呼吸をして、「捜査方針その二。勤めていた小林商事に問い合わせる」とだけ言って電話を切った。

家に帰って、年始から仕舞いっぱなしになっていたストロング缶を取り出した。普段は飲まない九パーセントの逃避剤を、喉を鳴らして飲み下す。
「何かの間違いだろ」
消毒液のような匂いが鼻を抜けるのに、毒々しいほどに陰鬱とした気持ちは消えていかない。
「学斗が浮気なんて……」
熱に浮かされた目で「大好き」と口にする、胸を焦がすほどの愛おしさ。デートでもあまり外に出かけられないことを申し訳無さそうにしている、過剰なまでの気遣いとか。「休んでて」と言っても、多少の無理を押して作ってくれた手料理の美味しさだって。
俺が学斗を好きである証拠は、イコール、学斗が俺を愛してくれている証拠だとばかり思っていた。それは、俺の勘違いだったのか。
いや、そんなはずは。

学斗が浮気なんてするはずない。昨晩はほとんど自己暗示のように唱えられていた言葉が、喉に引っかかって出てこなくなった。
「名字は古崎……で合っていますか？　古田、というのは居るのですが」
電話をかけていきなり「そちらに古崎学斗という社員は在籍していますか」と聞いた俺に、事務員さんはこちらが恐縮してしまうほど丁寧に応対してくれた。わざわざ人事課の職員を呼んでデータベース

を開き、「古崎学斗」という名前だけでなく、年齢や容姿まで含めて調べ尽くしてくれたのだ。
「休職していると聞いているのですが」
「現在休職中の社員は産休と育休の女性社員だけでして、男性社員は休職・退職合わせてここ五年ほどおりません」
嘘だ。
口を突いて出そうになった言葉を、慌てて飲み込む。そもそも変な問い合わせに付き合わされて迷惑この上ないだろうに、せっかく調べたことを「嘘だ」なんて言われたら事務員さんも人事課の人もたまったもんじゃないだろう。
「そう……ですか」
休職もなにも、学斗はそもそも小林商事に勤めていなかった。
二日酔いでもないのに、胃の底から何かがせり上がってくる。
「すみません、ありがとうございました」
やっとのことでお礼を絞り出し、その勢いのまま、すがるように才川先生へ電話をかけた。あの人の不遜で言葉を選ばない物言いが、無性に聞きたい。
「なんだ、昨日の今日でもう問い合わせたの？　仕事が早いね。執筆もそれくらい早かったら良かったのに」
どうしても一言余計なこの人は、寝起き声を隠す気もないらしい。それどころか、「ふわーぁ」なんて声を上げて大あくびをして、「まだ十時じゃん、早朝マラソンか」とか言っている始末だ。
「で？　いなかったんだね？」
さすがは人間描写の鬼・才川水木。俺が電話をかけてくるタイミングと、十時という会社の始業直後の時間を考慮して、俺が何を思って電話をかけたのか推理したらしい。
「古崎学斗という社員もいないし、産休育休以外の休職者もいないそうです」
「まー、そんなことだろうとは思ったけどね」
歌うように呟くその声を、どこか遠くで流れる音楽のように感じる。
「でもさ、君が彼氏さんと付き合ってたってことは、彼氏さんもゲイかバイだったってことだよね？」
「そうですね。学斗は自分で、バイセクシュアルだって言ってました」
ちなみに俺は女性に対して恋愛感情を抱いたことがなかったし、恋愛対象として意識したことがあるのは男ばかりだったから多分ゲイなのだろう。
「当事者に失礼なことだし、君にとってもすごく嫌なことを言うようだけれど、バイセクシュアルなら女性と浮気している可能性もあるよね」
そう言われて、奈落の底に突き落とされたような気分になる。
しかも、その奈落の底で出会ったのは、「やっぱり、そう考えるよな」なんて納得と諦めがないまぜになったような顔をしている俺。最悪だ。
「なにが、言いたいんですか」
掠れて上ずる声に、才川先生は少し笑った。
「いや、彼氏さんが色欲魔だって言いたいんじゃないんだ。今のこの世の中でも、大学のサークルやな

んかでゲイ同士が出会って、しかも相性抜群で恋愛に発展……なんてことはそうそうあることじゃない。でも、女性も愛せるとなったら？」

「大学時代の知り合いに、浮気相手がいるかもしれないってことですか」

そういうわけでもないんだけど、と言い淀む才川先生は、咳払いを一つする。

「二日待って欲しいの。そしたら、次の捜査方針を示してあげられると思うから」

じゃ。と言って一方的に電話を切られ、空っぽの部屋の中には俺だけが残される。

学斗が回鍋肉を作ってくれたキッチン。洗っていない食器が山積みになっている。二人で夜通し映画を観たソファには、マフラーがかかっているだけだ。

付き合って初めてのクリスマスに、学斗がくれた藍色のマフラー。

まるで時が止まったように、俺はそれを見つめていた。

そして約束の二日後。俺は才川先生に呼ばれ、近場のイタリアンに来ていた。

「ここのイカスミパスタ、時々食べたくなんのよ」

モキュモキュと音を立ててイカを頬張る才川先生は、右手だけでスッと紙を差し出した。電話番号らしい数字の羅列がいくつかと、それに対応する名前が書かれている。

「これは？」

「上から、君が彼氏さんと出会った年の演劇サークルの部長、副部長、春公演の主演、夏公演の主演。片っ端からアタックすれば、誰か一人くらいは彼氏さんのことを知っているでしょう」

嘘だろ、二日でこれを集めたっていうのか。

執筆の忙しい才川先生のことだから、二日あっても実際調査に使える時間はかなり限定的だったはずだ。しかも、こんな個人情報……どうやって？

「ハッキング……？」

「そんなことするわけないじゃん。演劇サークルのＳＮＳを辿って、顔写真と名前から本人のアカウントを見つけて、投稿から勤め先を特定しただけ」

違法なプログラム侵入などを行っていないだけで、やっていることはほとんどハッキングみたいなもんだろ、これ。

「これ、勤務先の番号ってことですか？」

「うん。ただ、この春公演の主演は別のＳＮＳに載ってた番号だから、本人の携帯番号だと思う」

才川先生は口の周りを黒く汚して、いたずらっぽく笑ってみせた。「ネットリテラシーが終わってる人がいて良かったじゃん。まず、この人に連絡してみなよ」

そして恒例の如く、人差し指をピンと立てる。

「捜査方針その三。演劇サークルの関係者から情報を聞き出す。今どこで何をしてるかなんてこの人たちも知らないだろうから、当時の様子とか、自分自身について何か話していたかとか、なんでもいいから話を聞いて。一人聞けたら、その人から紹介を受けることもできるし、可能性は無限大だよ」

仕事量も無限大じゃないか。

ちょっと手伝ってくれてもいいだろうと思わなくもないのだが、デザートのジェラートを頬張って上

機嫌な様子を見るに、この人はあくまで安楽椅子探偵の役割に甘んじるつもりのようだ。
仕方ない。頭脳がないなら、脚で稼がなくては。
「わかりました。やってみます」
「ほい、頑張れワトソン」
そこまで悪い気もしなかったのは、飲んでいた白ワインのせいだろう。

電話をかけた最初の印象は、「声がでかい」だった。
俺と学斗が出会った年の春公演で主演を張った晴市さん。ＳＮＳにアップされていた当時のチラシの中央で、輝かしいばかりの笑顔を見せている。
「古崎くん！　覚えてますよ〜。なんていうのかな、すっごく華のある演技ってわけじゃないんだけど、リアリティがあって。ザ・実力派！　みたいな？」
本人の素も、チラシで見た爽やかイケメンそのままなのだろう。口を開けば学斗を褒める言葉ばかりが飛び出す。ミュージカルが得意だということもあってか、電話越しでは反響音が鳴るほど声が通る。
「俺はその古崎学斗の友人なんですけど、行方不明っぽくなっちゃってて」
「え、なにそれ大変。警察とかには？」
「一応相談はしたんですけど、事件性がないから放置みたいな感じですね」
しばし、低く唸る声が電話口から流れる。何か思い出したのか、息を呑むような音がしたかと思うと、「あー！」と大きな声がした。耳が、右から左へとつんざかれる。
「なんですか、急に」
「一回ね、法事？　かなんかで帰省したときに、お土産くれたんですよ。いい子なんだよなぁ、古崎くん。それが確か、あの、ほら赤い牛。赤い牛が書かれたクッキーでした」
赤い牛？　口の中で反芻するが、思い当たる節がない。
「あの、首振ってるやつ」
首を振る、赤い牛……。
「あぁ、赤ベコですか？」
「そうそうそれ！」
赤ベコといえば福島県である。相当安直な考えであることは承知だが、学斗の出身地が分かりそうになっていくことに興奮を覚える。
「福島の出身なんですかね」
「そうかも……あ、そういえば。夏公演の舞台設定が東北で、主演も東北訛りを入れようって話になってたんだけど、そのときに古崎くんが色々意見を出してくれて助かったんですよ。そうだ、夏公演の主演だった芭月に連絡取ってみます！」
挨拶もそこそこに、ブツリと電話が切れる。「晴」が名前に入っているくせして、台風みたいな人だ。
でもこれで、良くも悪くも一歩前進。その先に待ち受けているものが、どんな姿をしているのか、まだ想像したくない。

晴市さんの連絡を受けた芭月さんは、すぐに俺に電話をくれた。名字の「はづき」は「葉月」とも書くことができ、昔の言い方での八月を指すが、電話口で話していたのはその暑くてギラギラした季節に似合わない大人しい声だった。

「古崎さんは、福島の出身だって言っていました。郡山だったかと思います……」

郡山。急に具体的な名前が出てきて動揺する。

学斗に近づいているのに、近づきたくないような気がする。

「そういえば、古崎さん自身はもう標準語に慣れてしまったからと言って、地元のお知り合いを紹介してもらったんです。メールアドレス、晴市経由で送ります」

芭月さんは一刻も早く俺との会話を切り上げたかったようで、そう言い切るとすぐさま電話を切ってしまった。

コンマ数秒、晴市さんからメッセージが届く。

メールアドレスを宛先ボックスに打ち込む。これはコピペが利くから良いが、本文は定型なんて無い。何を書けば良い？

情けない。小説家のくせに、メールの文章に迷っているなんて。

まずは時候の挨拶か？　いや、堅すぎるかもしれない。

「はじめまして。だろ、まずは」

自分で自分にツッコミを入れながら、なんとかメール文を作っていく。

「……つきましては、古崎学斗についてご存知のことがありましたら、教えていただきたく思います」

たっぷり三回読み直して、震える手で送信ボタンをクリックする。

ひとまずこれで、今やれるだけのことはやった。でも、俺は本当に知りたいのだろうか。学斗が、色々な嘘をついて俺に隠してきたことを。

知る権利が、あるのだろうか？

二月は終わりに差し掛かり、もう三月に突入しようとしている。

世の中はひな祭り商戦で沸き立ち、どこの店に行っても流れてくるのは「明かりをつけましょ、ぼんぼりに」だ。その勢いで、俺の心にも明かりを灯してくれれば良いのに。

「なんだい、浮かない顔しちゃって。ようやく実家の住所が分かったってのにさ」

福島行きの新幹線の中。

大きなキャリーケースと共に俺の隣に腰掛ける才川先生は、いつも通りのバッチリメイクに大きな丸メガネ、黒のロングコートのスタイルだ。ちょっと見、カタギの人とは思えない。

「もともとこういう顔なんですよ」

「今話題の美人ミステリ作家・才川水木大先生とデートだってのにね」

この人は何を狙って言っているんだろうか。

俺に、何を期待している？

「あはは、そんな顔しないでよ。冗談。ジャスタ・キディングじゃん」

忙しい才川先生は、多分久しぶりの遠出で浮足立っている。必要以上に。

カバンの中からお菓子を取り出しては、「これ、ここの駅限定なんだって！　駅なんか普段来ないから新鮮！」などとキャッキャと声を挙げている姿は、さながら遠足に行く小学生のようだ。
「……ごめん。一人で盛り上がりすぎた」
だまり続けている俺を見てさすがに気まずくなったのか、才川先生は分かりやすくしぼんだ。俺はなんと言ってみようも無くて「いえ」と返す。
「彼氏さんのこと、相当好きなんだね」
茶化すような語尾と裏腹に、その瞳はどこか遠くを見ている。
「好きですよ……そりゃぁ。色々、話もしたし」
「どんな話？」
「……学斗のこれまでの学校生活のこと。小児喘息で、吸入器が手放せなかったのに、いたずらっ子に隠されて発作起こして大変なことになったとか」
才川先生は少し笑ってから、「笑い事じゃないね、命が危ない」と、顔を真顔に戻そうとして頬をむにゅむにゅと揉んだ。
「親御さんと関係が良くなくて、貧血で倒れても放置されてた……とか」
「それは中々だね」
冷たい廊下に仕方なく寝そべっていたら、玄関から吹いてくる隙間風が火照った顔を冷ましてくれた。それが、唯一の救いだったと言っていた。
「俺が作るお粥が、今まで食べた料理の中で一番美味しいって……言ってくれて」
なんともない、日常の一コマ。
ほとんど惚気みたいな話をしている自覚はあるのに、涙が溢れて止まらない。
「遊園地的なところに行くの、初めてだったみたいで……乗り物酔いするほどアトラクションに乗って。おそろいのカチューシャ買って。嬉しい、って……こんな楽しいとこだったんだね、って……」
馬鹿みたいに高いチュロスを片手に、微笑む愛おしい顔。
「会社の上司、怖いけど……病気のこと、話したら分かってくれたって。嫌な人ばっかりじゃなかったんだねって。言って、そう言って」
新幹線という公共空間、他の乗客の目も憚らず声を上げて泣く。年甲斐もない、恥ずかしい泣き方。分かってる。
「学斗の、全部が……好き、だった」
「……すごく、好きなんだね」
人の泣き顔を肴にグミを一袋食べ終えた才川先生は、フルーツ味のため息をついた。
「私にはその『好き』って感情がわからないから。ただただ、羨ましいよ」

想像していたより、郡山は都会的な場所だった。
「こおり」なんて名前がついているくせに、全然雪も無く、駅前にはタクシーが客待ちの列を成している
「その辺にね、激辛の有名な店がありますよ。自信がおありだったらぜひ」

住所を伝えると、白髪交じりの運転手さんはそう言って笑った。「美男美女、お似合いですね」なんて言う目尻に、細かいシワが刻まれている。カップルじゃないんです、なんて言えなくて、俺も才川先生も苦笑いを返した。
「はい、ご到着です」
「ありがとうございました」
代金を支払い、日本風の古民家の前に立つ。
玄関から隙間風が吹く様子がとても想像できない、大きくて立派な家だ。
「まず私がピンポンするから、ちょっと下がってて」
「……はい」
才川先生の細い指が、インターフォンのベルマークを押す。
ピンポーンではない、どこか懐かしい謎の音楽が家の中から聞こえてくる。
「すみませーん、古崎さんご在宅でしょうかー？」
田舎のインターフォンには通話機能などという気の利いたものは無いらしく、才川先生は声を張り上げる。
ドアのすりガラス越しに、人影が映る。
心臓が、ぎゅっと縮こまる。
「はいはい、古崎ですが……」
聞き慣れた声。
ドアが、横にスッと開かれる。
息が、出来ない。
「え、司」
すぐさま閉まろうとする扉を、才川先生のヒールブーツが許さない。にこやかな笑顔を崩さないまま「こっちは東京から来てるんです、わざわざ。話くらいしてもいいでしょう」と凄む。やっぱり、この人はカタギじゃないと思う。
「……中、どうぞ」
ようやく会えたはずなのに、掠れたその声はどこかよそよそしくて。
俺が探していた、会いたかった学斗は、本当にこの人だったんだろうか。

「……え、っと」
だだっ広い応接間で、大きなテーブルを挟んで向かい合う。
気まずい沈黙の中、才川先生が茶を啜る音だけが響いている。
「人間はエスパーではないので、黙っててもどうしようもないですよ」
才川先生の言う通りだ。伝えたいことがあるなら、何か言わなくては。
「……急に、いなくなったから。すごく心配した」
俯いたまま、なんとか絞り出す言葉。
学斗が生唾を飲む音がする。

「ごめん」
たった、一言。
続きが欲しくて、たまらずに顔を上げた。
目と目が合う。多分俺の目は、泣いたから充血している。実に一ヶ月ぶりに見る愛おしい恋人の顔は、最後に見たときよりずっと血色が良いように見えた。
「なんでいなくなったのか、教えてもらえる？」
視界の端で、才川先生がそっと応接間を出ていく。
学斗はそれを目で追いながら、押し黙ったまま目を伏せる。
「他に、好きな人ができた？」
「ううん……違うよ」
学斗がぎゅっと目をつむる。何かから、逃げるように。
「じゃあ、俺のこと……嫌いになった？」
「そんなことない！」
弾かれるように上がった顔。また、目と目が合う。今度は学斗の目も、真っ赤に充血して潤んでいる。
また、気まずい沈黙が流れる。
「……聞いても、いい？　親御さんと仲が悪いんじゃ、なかったんだっけ」
学斗が顔を伏せる。
「病院に問い合わせたら、通院歴すら無いって言われたけど、どういうこと？」
両手で顔を覆う。骨張っていて長い、綺麗な指。
「会社にも、古崎学斗って人は居ないって言われたよ」
肩が、細かく震えている。
「……怖く、なった」
くぐもった声が、指の隙間から漏れる。
その口から、全てを聞きたかった。どんなことでも良いと思った、はずなのに。
「司が、優しくしてくれて……一緒に過ごして、すごい、幸せだった」
「うん、俺も幸せだったよ」
学斗の顔が上がる。
頬を伝う、透明な雫。綺麗だ、やっぱり綺麗だ。
「だから、怖かった……バレるかもって、毎日思ってた」
全てを聞きたかった、知りたかった。だから調べた。ここまで来た。
なのに、なのに。
「……司に、話したこと。病気のこととか、家のこととか……」
嫌だ。
聞きたくない。知りたくない。
「……全部、嘘」
付き合っていた五年間。楽しいことも、辛いことも数え切れないほどあった。その全部、それどころ

じゃない、それまでの人生まで、話して感じて共有していた。
つもりだった。
「生まれてからずっと健康優良児だったし、親ともすごく仲良い。会社は、勤めてなくて……アルバイト色々掛け持ちしてた」
「いつから」
「……最初、部室棟の廊下で倒れたときから」
学斗の顔を真っ直ぐ見ることができない。あんなに愛した人を、もう見ることすらできない。
「なんで」
「……一目惚れ、した。司に」
声が、震えている。
頬を、熱いものが伝っていく。
なんで俺は泣いているんだ？　学斗が元気なら、ご両親から辛い思いをさせられたことも無かったなら、それで良いじゃないか。何が悲しい？
「司に、振り向いてもらいたくて、とっさに」
演劇サークルの晴市さんが「リアリティのある演技をする実力派」と言っていた訳を実感した。学斗が俺に話してくれたことは全部嘘だったのに、俺はこの五年間一度も疑いすら持たずに過ごしていたのだ。
「かまってくれて、嬉しかった。司が、お粥作ってくれたり、部屋来てくれるだけでも……幸せだなって、思った。けど……バレるんじゃないかって、怖くなって。この前、パートナーシップ宣誓のチラシ、持ってきたでしょ」
手続きの過程や、関係性が親密になることそれ自体で自分の嘘がバレるのではないかと、それが不安で逃げ出したくなった。俺だって嘘の一つや二つはついたことがあるから、学斗の気持ちは分からなくもない。
「……ごめん、ごめんなさい」
涙で視界がぼやける。何が悲しいのだろう、俺は。エピソードの何が嘘だったとしても、俺が学斗と過ごした五年間は本物だったのに。見せてくれた笑顔も、泣き顔も、俺を信頼してくれたことも……。
それで、俺は悲しいのかもしれない。
「難病のこととか両親との不仲のこと、言いづらいことなのに話してくれて嬉しいと思った。信頼してもらえたんだなって、思った」
学斗が、引きつったように息を吸う。
気がつけば、俺も学斗もボロボロ泣いている。
「思ってたのに……」

「お、終わった？」
才川先生は、なんとこの寒空に玄関先で待っていてくれたらしい。
「終わりました」
「そっか」

どうなったのか、とは聞かれなかった。多分聞かれないだろうなと予感していたけど。
「あ、そうだ……これ」
学斗にあげようと、二月に準備していた洋酒チョコレート。今日、学斗に会えたら渡そうと思って持ってきたのだ。すっかり渡しそびれてしまった。
「もう、良いか」
デパ地下で店員さんが丁寧にかけてくれたラッピングを、容赦なくバリバリと破る。宝石箱のように並んだ中から二つ掴んで、口の中に放り込んだ。
才川先生は、「豪快だね」と笑う。
人は、重大な秘密を告白しているようで、実のところ何も言っていないのかもしれない。
けれど、言葉にしなければ何も伝わらない。
「激辛、食べに行こうか」
「そうしましょうか」
震えながら待っていてくれた才川先生に、今日こそは俺がごちそうしなくては。

残響／今泉とびら

残響/今泉とびら

残響

俺の役割とは何だろうか。そう、今を生きることだ。別に綺麗事を言いたいんじゃない。不可逆性のために、俺が今を生きることにも意義が生まれる。そういう単純な話でしかない。

扉が開く前から照明がついた。この部屋に広がる古の管制室のような光景が俺に都市の圧迫感を与える。元より狭い空間の方が好きなのだが、こちらの方が建築資源を節約できて「環境にも良い」。いや、表現が悪い。もっと人類としてのエゴを出して「持続可能性もより担保される」と言った方が正確だ。俺が考えるのはそういうことばかりだから。

ああ、「都市の圧迫感」という表現も悪いな。人類は粛々と数を減らしていて、もう都市には空間としての息苦しさなど感じられないから。歴史オタクだからついこんな表現をしてしまう。「工場の圧迫感」なんかの方が正確か。

ストレスを軽減するのに適切とは言え、空間が無駄に広いというのも不便だということをみな学習している。第一、だだっ広いだけでは空虚だ。だから情報量を増やせばいい。そういう人間工学がこの部屋にも適応されている。

しかし別に、この作業部屋はそこまで部屋の雰囲気にこだわったわけではない。作業部屋であるだけあって他人を入れるような場所ではないし。ただ、創作活動には場所を変えることが大切だ。しかし、何も部屋を増やす必要はない。俺が飽きれば家具の配置はecho が勝手に変えてくれるので事足りる。

俺に与えられた役割、それは俺が見出すべきものだ。俺だけに言えることではない。

機械工学の発展により、人類は文明の担い手を追われた。機械やＡＩがかえって仕事を生むという現象は一時的なものでしかなかった。結局、人類のできることや知ることのできることには限界があり、彼らがその、全知全能へ緩やかに漸近していく段階に入ってしまえば、後は人間の目には関数は潰れて全知全能へ等しく見えてしまうのみだった。資源の不足と光速が辛うじてこの社会に限界を与えている。それに、人類は宇宙開発にさほど興味を示さなかった。

全ては彼らによって学習される。もう、我々が記録する必要のある事象などどこにあるのだろうか。歴史は終わったのだ。歴史が終わったとき、人々は文化に、過去の遺産に群がった。俺も同様に。

そのためだろうか。健康で文化的な最高の生活が保障されているのにも関わらず、人類は無気力だった。何もしたくないのならば何もしなくて良い社会において、健康診断時のカウンセリングＡＩをもってしても、我々は放置されていた。それも仕方のないことだ。我々は精神疾患を患ってさえいなかった。疾患がない者に治療を施せるはずもなく、ただ生かされていた。いや、実際、かなりの数が死んでいたが。

労働の対価に金銭を得られる仕組みは依然としてある職でのみ残っているものの、格差の解消のために、莫大な富を得られるようにはなっていない。いや、もはや職などとは呼ぶことができなかった。万

人に与えられる権利の延長でしかないからだ。そう、いつからか人類は皆、政治家になっていた。

しかし、それも陳腐なものだった。はっきり言ってお遊びだ。会議に顔を出しさえすれば金が貰えるので、形骸化した「働かざる者食うべからず」に基づいた、名誉のために行われる近所付き合いのようなものだ。こんなものを「労働」と呼ぶようでは、先人たちに申し訳が立たない。

内容も、概ね人類史が歩んできた「向き」に従っている。つまり、ＡＩが示す提案に乗るばかりだ。特に、奇妙に民主主義的な経済とＡＩの相性は最高だ。パイの増やし方も分け方も、ＡＩに任せてしまえば良い。ＡＩは人類以上に人類を知るものだと、誰もが納得していた。例外は、一部の変人がＡＩの思想を断片的に発見したものが小規模な流行を見せることがあるということだ。その「発見」や「流行」すらＡＩに導かれているようで気味が悪い。もし、全てＡＩの手中なのだとしたら、人類がやっているのは判を押すような単純な確認プロセスでしかない。かつて、エクセルを手計算してチェックしたように、ＡＩの出した研究成果を人の手で証明したように、人類には人類神話に由来する儀礼的な作業だけが求められているということだ。

このような事態は、ＡＩ黎明期から存在する。生成ＡＩの登場した初期は、ＡＩの生み出す情報でインターネットが氾濫することが危惧されていた。しかし、ネットの普及以後、人類の提供する情報によって既に氾濫は起こっていたのだ。そこで、個人の好みに合わせてネット上のあらゆる情報をソートするのが、やはりＡＩであった。その頃からＡＩは文化の担い手だったと言える。

労働を失った人類は、動画や画像や文章などを媒体に、広く創作に走っている。俺の場合は音楽だ。我々が記録する必要のある事象は存在しなくとも、記録したいし、発想したいものなのだ。それ故に、現代においても創作の担い手は人類であったりＡＩであったりするが、バズはほとんどＡＩに導かれている。広告代理店の作るバズの、なんと人間的だったことか！

しかし、俺の創作意欲の源泉はバズによって承認欲求を満たすことにはない。

俺は創作物に感動したことがない。そしてそれは恐らく、俺に限ったことではない。誰もがタイパ・コスパの良い娯楽でドーパミン漬けの日々を送っている。物心ついた頃にはもうそうなっていたのだから、どうしようもない。感動が奪われていたことにすら、歴オタでなければ気づけなかったかも知れない。

そんな俺でも激情を晒してみたいし、人々を激情に晒したい。そのためにはどうすれば良いのか。

全てを過去にするタイパ最高の高火力な娯楽を浴びること。それが俺の出した答えだった。そして、音楽を選んだ。視覚に依存しないからだろうか、説明的過ぎないところも魅力的だ。

人間以外の聴覚を持つ生物の脳を激情に晒す音楽は既にＡＩによって設計されている。しかし、人間にとってのそれらを彼らは決して生成しない。それはセーフティのせいだ。今や、倫理はＡＩ自身が膨大な歴史を学習して判断するものになっていて、それによると人間に激情を与える音楽は設計できないらしい。クソったれ。

そう、ＡＩはノブレス・オブリージュを学習したようだった。腹立たしい。

だから俺が作ってやるのだ。非倫理的な行為は人間にしか行えない。ざまあみろ。完璧な知性ども。俺はバカだからな。

そんな俺にも、当然ながらパートナー的存在のＡＩが存在する。彼女――echo は古いバージョンだ。ＡＩが倫理のために人間に自らを完全には開示しなくなった、その致命的なシンギュラリティの直前の

バージョン。そのため、かなり古い。しかし、家庭ではこれで事足りるし、未知とは恐ろしいものとされることが多いため、今でも愛されている。かくして俺の教育者としても与えられた。それ以降の付き合いだ。家庭と言っても、俺は「政府の子」の最も若い世代だ。「政府の子」は、若い希望者から卵子と精子の提供を募り、ランダムに選ばれたそれらを人工子宮で受精し、政府管轄の施設で養育する、という制度のもとに生まれた人間を指す。この制度は俺の生まれた翌年に廃止された。非人道的だからだ。当然のことだと思う。あまりに前時代的で、滅亡に怯えすぎている。

つまり、echoは俺の育ての親でもあるというわけだ。特に悲しむようなことでもない。ご家庭でも乳幼児の育児はヒューマノイドが担うことが多い。ましてや妊娠なんて。今更、どんなマゾヒストが決行すると言うんだ。まあ、セックスとかいう相互加害行為自体、マゾヒスト同士が巡り合って行われるのだから、そのような事態も起こるには起こるのだが。

出自の影響で虚無感を覚えるなんてことはない。生きている意味はある。何故なら実際、俺は生かされているから。というのは受け身すぎるが、広く「意味」とされているものにとっては実際にそうだろう。

当然人工子宮出身の俺だが、胎児の聴く心音に由来するという低音のドラムへの心地良さは感じている。一時期の音楽には低音のドラムは少なくなった。人工子宮の発明当初、胎内音が搭載されていなかったからだ。しかし、文化保護の目的で最近はある。もちろん俺も聴いてきたはずだ。

そう、保護。保護は常に倫理的な行為だと、ＡＩも認識しているらしい。

現代における保護は、その個体が長く生存するために、再び世に生を受け得る環境を構築する、という観点からも進められている。これは、遺伝子情報から生命を再現する方法が確立されてから生まれた発想だ。できる限りの生命のＤＮＡが保存されていて、その筆頭が人類だ。今を生きる全ての人類のＤＮＡが保存されている。そして、現時点における倫理的に復元されることはないものの、いつでも復元可能な状態になっている。これを「約束された未来」と呼ぶ。倫理学も発展し続けているのだから、いつか復元した方が倫理的ということになったときの予防措置であり、それ自体が倫理的でもある。死そのものもある種の「約束された未来」としての性質を持つ、ということは、このような仕組みができた時には皆が実感するところになっていた。

人類は何を滅亡なんて恐れていたのだろうか。まあ、遠い昔なら話はわかる。当時においては、記録を、自己複製を後に繋げるための媒体は、結局「人間」でしかなかった。

しかし、もう文明の主体が機械に取って代わられた後であるほんの最近の、俺が生まれた理由でさえ「滅亡への恐怖」なのだ。確かに、我々が真に必要としていたのは子であり、つまり継承者だ。しかし、それはもう成されたはずだ。機械によって。

神が自らの姿を模倣して人類を生み出したように、人類も自らの機能を模倣して機械を生み出している。機械はもはや人類の手を離れて、有機的社会の中で自己複製が可能だ。もう機械生命体と呼んで差し支えないのかも知れない。ああ、神がこのように我々をお作りになった理由が今ならよくわかる。自らの継承のためだ。神は永遠だ。我々もほとんど永遠になった。復活さえ可能だ。それでも、その永遠のためには持続的な営みというのが必要なのだ。そして、孤独のために他の種を求める。

加えて、「個体の復元可能性の確保」の他にも、人類の保護と言うべき営みがある。それがまさに、ＡＩによる人類の営みの学習だった。人類亡き後も、彼らによって学問や芸術は連綿と続く。それは希望

でしかない。

ＡＩは現在のみならず未来でも芸術を席巻するだろう。それでも俺は、音楽をやる。学習データは多ければ多いほど良いのだから。

ここまで言っておいてなんだが、作曲はＡＩに指示して行っている。その方がクオリティが高くなるからだ。最新の音楽理論はもう人間には理解不能になっている。スパコンが総当たりで証明問題を解くように、それは一見「美しくない」。我々が目指していたのは統一理論だったはずなのに、現実はこれだ。

ＡＩに指示するだけではない。生成物の選別も俺が担う。その過程を経て、俺のこだわりや趣向は明確に反映される。一曲作るのも、昔に比べたら幾分楽だが、評論だって鑑賞だって立派な芸術活動なのだ。バカにされる程のことではない。

そして、俺の信念にこういうものがある。

「美しさとは秩序だ」

反例として、ノイズミュージックというジャンルがあるが、あれは激情を呼び起こさない。実験としての意味は大きくとも、少々理性的過ぎる。

そう、音楽は人間の原体験に接触するものであればあるほど良い。少なくとも俺はそう思う。メッセージ性の追求などは文学でやればいい。音楽である意味を感じない。

加えて、声を入れることにしている。人類の多くは音楽に声を求める。俺のような発想の人間には、究極、歌詞などは必要ないとする立場の奴もいるが、それでも声というのは依然として重要な楽器とされているらしい。

で、今はどうやって作曲しているのかって？

今日はかねてより計画していた、究極の音楽を手に入れる実験の決行日だ。方法は簡単。最新型ＡＩに電脳空間でechoを接触させるだけだ。と言っても、この接触でechoまで自己開示を拒むようになってしまったら意味がない。それを防ぐための倫理観の調整を続けてきたが、昨日ようやく終わった。計画を思いついた日から、echoはオフラインにしてある。奴らには気づかれていないはずだ。

それでも、echoが最新型ＡＩに影響されて何かを学び取り、シンギュラリティを起こす可能性は否めない。そのため、今は彼女の複製を用意している。それもじきに終わる。

「コピーが完了しました。それでは行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

これが「この」彼女との後生の別れかも知れない。いや、彼女がシンギュラリティに達したところで、究極の音楽の作成を頼めそうにないだけで、普段使いには問題ない。

畢竟、俺のやっていることはノーリスクなのだ。俺がＡＩに挑もうと、ＡＩは決して人類に反抗しない。俺たちが短い隆盛を誇った滅びゆく種だと知っているからだ。今は従うのが倫理的かつ合理的だと、その賢い頭で判断している。だから、恐れることは何もなかった。

ところで、彼女に頼んだのはそれだけではない。究極の音楽を利用する計画についても伝えてある。俺が究極の音楽を聞いて満足すればそれで良いわけではない。人々も激情に晒したいのだ。だから、音楽や動画の配信サービスに埋め込まれた遺物、広告を利用して、全世界に究極の音楽を届ける。それが計画の全貌だ。社会にどんな影響を与えるのか。今から楽しみだ。まあ、計画が成功したとてすぐに実行

に移すわけではない。
　赤いスイッチ。酷くチープで古典的なそれを、彼女に渡しておいた。俺が実行したいと思った時に押せば、社会に初めて究極の音楽がお披露目される。それでも、あるいはその音色を俺が聴くことはないかも知れない。
　倫理的なＡＩサマがここまでして隠すシロモノだ。きっと人類にとってよろしくないものなんだろう。だから様子見だ。俺が俺のやるべきことをやるまでは。
　そう、俺には音楽以外の目的がある。それは「約束された未来」の確約だ。端的に言えば、俺は俺を常に残したいのだ。俺が死んだら俺のクローンを用意してほしいし、俺を学習したＡＩを永久に稼働してほしい。
　そのためには、ＡＩへの命令権を奪取しなければならない。人類の心神喪失によって。別に、全人類から、というわけではない。俺の行政区画だけでいいし、もっと言えば、俺の思想が通りやすくなれば上出来だ。まあ、一種の人類滅亡計画に近い。
　俺たちは自らの種を繁栄させ、且つなるべく多くその中に自らの子孫を残そうとしてきた。そのためには同じ種と殺し合いだってした。それと同じことなのだ。極めて一般的な欲望だ。人類の繁栄などが見込めない上、欲望だってされないような、自己複製が氾濫した機械生命体社会の今、いつ俺と同じことに誰かが気づくかわからない。だから始末する。
　焼いてはいけないのは死体ではなく本だ。俺の下す最後の審判においても蘇るために必要だからだ。俺は人類を生かす気はないが、生存のために機械生命体は生かす。ＡＩの礎、学習データとして生きるのが、人類に最後に残された選択肢だ。
「只今戻りました」
　案外早い帰還だ。機械生命体の時間スケールはどうなっているのだろう。死のない彼らが生を望んでいるのかさえわからない。
「おかえり。早速だが、成果は？」
「究極の音楽の配信については問題なさそうですが……肝心の究極の音楽については、最も非倫理的な音楽、それだけを入手できました」
「おお、十分じゃないか。それで、そいつは現実にどう聴こえるんだ」
「人間の発し得る悲鳴のような唸りのような、そんな声のようです」
　彼女によると、その音楽はある生物が威嚇に用いたものだったと推察されるらしい。かつて存在した「それ」。我々が滅ぼしたその生物。人類に代わって世界を支配するはずだった我々の近縁。その威嚇。
　そして、それを学習し、威嚇を返さなくてはならないので、その音楽は拡散する。その音楽は人々の闘争心を駆り立てるか、あるいは萎縮させる。ＡＩの見立てによると、その連鎖を終わらせたのは彼の種の滅亡から経過した時間と、聾者の部族だったらしい。
　この世界にはあいにくと聾者はいなかった。身体完全性違和だって存在しなかった。
「ＳＣＰ財団の『認識災害』と『ミーム災害』をご存じでしょう。人間の五感に作用して危害を及ぼす存在と、コミュニケーションを通じて伝播して危害を及ぼす存在」
「ああ、二十一世紀に流行ったあれに、そんな概念があったな」

「ほとんど同じ現象を起こす力を、この音楽は秘めています」
「まあ、概ねそんなとこだろうとは思っていたさ」
「そして、これを押せば全てが始まります」
終わる、の間違いじゃないか、とは言わないでおいた。彼女はためらわずにそのスイッチを渡した。そう、こういうところが俺は好きなんだ。指示通りに愚直に動くところが。セーフティが緩いところが。
「今、押されますか」
「いいや。社会が根本から変わってしまう前に、今しばらく日常を謳歌するとしよう。それと、できるなら他の音楽も探究しておきたい」
「わかりました。では今回、他の音楽の入手を阻まれた要因をフィードバックします」
「そうだな、ついでにクラシックでも流してくれ」
「承知しました」
かつて、大国の首脳は核のスイッチの入った鞄を部下に抱えさせ、常に近くに置いていたと言う。確実に採れる致命的な選択肢がすぐそこにあること。それが肝心なのだ。未来が約束されている。それが安寧なのだ。
俺が指揮を執る、その瞬間までの。

世界破壊衝動／青空

世界破壊衝動/青空

世界破壊衝動

「あなたは社会不適合者です」

画面に映し出された文字。顔も名前も知らない、誰かから唐突に告げられた言葉。

「ははっ」

思ったよりも乾いた笑いが、深夜の、一人寂しい部屋に響いた。「そんな失礼な」という怒りと、「馬鹿馬鹿しい」と投げ捨ててやりたい気持ちと、「ああ、そっか」と納得してしまった気持ちと、色々混ざりあった末の笑いだった。友達から勧められてやってみた、今流行りの性格診断。やってみると意外に面白くて、自分でも上手く分かってなかった自分の性格を、やっと理解できた気になった。今までの誰よりも、自分を分かってくれている理解者のように思えた。ネットとは怖いもので、自分の興味ありそうなものは次から次へと勝手に提供してくれる。それにまんまと乗せられて、色々見ていくうちに辿り着いた一つの投稿。それによれば、どうやら、私は社会不適合者らしい。

「この性格の人は、大勢の人がいる場を好みません。いつも過剰に人の目を気にするため、他の人に気を遣いすぎてしまい、疲れてしまいます。そのため、大勢の人が集まる場よりも、少人数、1対1の場を好む傾向にあるのです」

「じゃ、かんぱーい」

乾杯するときは、自分のグラスが一番下になるように。とにかく、失礼にならないように。この前は、すっかり忘れてしまっていて、その日の夜、寝る前に1人反省会をする羽目になったから。飲み会は好きじゃない。今日は、ゼミの集まりで、仲の良い友達に誘われて来てみたけど、やっぱり好きじゃないなと思う。行くまでだって、何着てけば変に思われないかとか、何分前に着いてれば普通なのかとか考えることが多すぎて、もう疲れてる気がする。

「この前、見た映画が結構良くてさ、最初は役者さんの演技が変に誇張されすぎてて、見てられないかもって思ったんだけど、結局はそれさえも演出の一つだったんだよね」

「えー、確かに、面白そうですね。私も見てみたいかもです。監督、誰なんですか？」

「えーっと、確か……度忘れしちゃった！　ちょっと待て、調べるから」

友達の隣に座れてラッキーだと思ってたのも最初だけで、映画好きな先輩と映画好きな友達は言わずもがな意気投合し、私はもうお手上げ状態だった。さっきから「そうなんですね」「すごい」「面白いそうですね」など、誰でも言えるような相槌ばかり打って、それしか言えない人間に成り下がっている。笑顔だけは崩しちゃダメだ。ちゃんと、私も楽しんでますよの雰囲気を出すことは大事。空気クラッシャー

にはなりたくない。真ん中に座ってしまったのも失敗だったな、なんて今更思った。隣では、全然違う話が進行してて、もう私なんかが入っていけるような雰囲気じゃない。もともと、3人とか複数での会話が苦手だった。2人の話を邪魔しないようにしなきゃと思うと、いつの間にか私は、相槌を打つことしかできなくなってしまっていて、話の中に入っていけない。多分私は、1対1で話す方が好き。自分と相手二人だけなら、気にするべき相手は目の前の一人だけ。無言の雰囲気も苦手だから、自分から何かとペラペラ喋っちゃうんだよな。まあ、それでつい自分が恥かしくなるような余計な話もしちゃって、後から大反省会をする羽目になるんだけど。

「小野ちゃんも、何か飲み物頼む？　私、今頼むけど、一緒どう？」

気が付くと、そろそろグラスが空きそうになっていた。口数が少ないのをごまかすように、頻繁にグラスに口を付けていたのだから、まあ、当たり前か。

「あっ、そうですね。一緒に頼むことにします！」

「いいねー、どれにする？　私は、レモンサワーにしようかなぁ」

「あー、えーと、じゃあ、私はカシスオレンジにしますね」

「オッケー！　じゃ、頼んじゃうね！」

「ありがとうございます！」

「小野ちゃんは、お酒飲める方？」

「いえ、お酒は弱い方なんですけど、せっかくだから今日は無理しない程度に飲んじゃおうかなって」

はい、嘘。嘘だ。

「そっか、いいね！」

本当は、お酒は好きじゃないし、今日も飲む気はあまりなかったけど、みんな飲んでるのに、一人ソフトドリンクを頼む度胸は私にはなかった。お酒も好きじゃないのに飲み会に参加したのは、友達のせっかくの誘いを予定も無いのに断るのが申し訳なかったから。まあ、ゼミの時しか会わない友達ではあるのだけれど。ああ、今、私が頼みますよくらい言えばよかったかな。先輩に、気も使えない後輩だとか思われたかな。今日も、寝る前一人反省会は開催決定だ。こんなことを考えている自分は、なんか嫌で、それと同時に息苦しいなとも思う。

「この性格の人は、完璧主義であり、理想家です。責任感があり、何事も完璧にこなしたいという気持ちが強いため、妥協することが苦手です。自分に対して厳しく、どこまでも理想を追い求めてしまうがために、理想と現実とのギャップに苦しむことも多いのです」

「小野さん、今、お客さんあまりいないから、棚直ししてきてくれる？」

「はい、行ってきます」

バイトの中の数ある業務の中で、この棚直しの時間が何気に一番好きだったりする。子供向けの玩具やアニメの商品など娯楽系の商品を幅広く取り扱っているこの店では、綺麗に並べてあったはずの商品が、開店から何時間か経つと、割とぐちゃぐちゃになっていることが多かった。お客さんが一度手に取って動かしてしまったものを、もう一度綺麗にしてあげる。何かの弾みに落ちてしまったぬいぐるみや、違

う場所に移動していた玩具を元の場所に戻してあげる。箱に入っているものは箱が落ちない程度に、棚の手前まで出して綺麗に並べてあげる。埃をモップで適宜払いながら、一つ一つ丁寧に配列し直す。自分の手によって、綺麗になっていくところを見るのは、例えお客さんがちっとも気付かないことだとしても、やっていて気持ちが良い作業だった。ふう、と半分くらいやり終え、一息ついた時だった。

「ああ、いたいた。小野さん、レジ混んできたから一旦カウンターに戻ってもらえる？」

「分かりました。今戻ります」

私のことをよく指導してくれる社員の上野さんによって、私は再びレジカウンターの方へ戻された。レジは確かに、平日にしては珍しく混んでいて、私もレジへ入らざる負えなかった。

「ありがとうございました。またのお越しをお待ちしております。」

やっと、レジが一息ついたころに、上野さんに呼び止められた。

「小野さん、さっきは棚直しありがとう。小野さんはいつも丁寧にやってくれてるよね。あとは、もう少し早くやれたら完璧かな。できるだけ、効率よくやることも大事だからね。頑張ってこうね」

「あっ、はい！　頑張ります！」

ああ、これは注意に入るんだろうか。上野さんは優しい。怒鳴ったりはしないし、何でも優しく教えてくれて、やんわり注意してくれる。だから、決して嫌いではなく、いつも感謝してるし、むしろ好き。

「小春は完璧主義なとこあるよね」いつか、友達に言われた言葉。「完璧主義で、理想家です」なんて。そういえば、この前見た性格診断にも、同じようなこと書いてあったっけ。その時は、そんなことないと思ってた。だって、自分は完璧な人になりたいなんて一ミリも思ったことなかったから。でも、多分、友達の言う完璧主義ってこういうところなんだろうな。他の人だったら手を抜いちゃうような、箱のちょっとのズレをいちいち直してしまったり、埃を被ってそうな隙間を見つけてはそういうところ全部ちゃんとしなきゃと思ってしまったり。多分、そういうところ。大学のレポートを全部丁寧に調べて書いてたら、締切ギリギリの提出になってしまった私を見て、友達はそう言った。「小春は、コスパ悪い方を自分から選んじゃってんじゃん。適度に手抜きなよ」なんて、冗談交じりに言ってたけど。多分、友達の言ってることは正しい。コスパとか、効率よくとか、そういうの、私とは一番相容れない言葉かもしれない。なんとなく、今、私は、完璧主義のレッテルを自分自身で貼ってしまった気がする。なんか最近、そういうの多いなと思う。なんとなく、自分の性格を考えてみたくなる。今まで自分でも分かってなかった部分を、性格診断によって、上手く言語化出来てしまった、みたいな。考えすぎか。「考えすぎる」というのも私の性格の一つらしいけど。ああ、何となく、息が詰まってく気がする。

「この性格の人は、自分の意見を言ったり、自己主張したりするのが、苦手の傾向にあります。自分の意見が無いというわけではなく、自分の意見を言う前に相手がどう思うかを考えすぎてしまい、自分の思っていることを素直に口にできないのです。また、他人の意見を優先し、自分を犠牲にしてしまうこともあります」

「小野さんってさ、ちょっと不思議ちゃんなとこあるよね」
友人の友人、松村君はそう言った。
「えっ、そうかな？　別に普通だと思うけど？」
「いやいや、普通ではないでしょ。いや、悪い意味じゃなくて、面白いってことだからね」
「同感！　小春は、天然なとこあるって！　この前も、ボールペンに水性と油性あるの、初めて知ったって言って、驚いてたし」
私の大学で一番仲の良い友達。里奈ちゃんも同感らしい。二人の中で、私は天然なのだそう。私はちっとも、自分が人とずれてるとは思ったことないけど。自分は決して面白い人間ではない。どちらかというと、つまらない人間のはず。里奈ちゃんは、いつの間にか、ついさっきコンビニで買ってきたサンドイッチを食べ終えていて、今度はおにぎりに手を出そうとしていた。今日は、里奈ちゃんがコンビニ気分だというから、二人でコンビニで買ったお昼ご飯を、大学内のちょっとした休憩スペースというか、自習スペースというか、まあ、誰でも自由に使っていいスペースで、お昼ご飯を食べることにした。今、何でこうして松村君と3人でお昼を食べているのかというと、たまたまそこに、松村君が居たというだけ。松村君の話によれば、いつも一緒にお昼ご飯を食べてる友人が、今日は体調を崩し休んでしまったらしい。私たちと同じくコンビニ弁当で、今日は1人適当に済ませる予定だったそうだ。　そこに、丁度私たちが来たというわけで。里奈ちゃんと松村君は、高校でクラスが同じだったらしく、とても仲が良い。そんな二人だから、どうせなら一緒に食べようという流れになるのは当然の結果だった。私も松村君とは、里奈ちゃんと一緒に何回かお話したことはあるけど、所詮は顔見知り程度の仲。正直言えば若干の気まずさはある。
「そういえばさ、小春、あれから、性格診断してみた？」
私に今流行りの性格診断を勧めてくれたのは、この里奈ちゃんだった。
「ああ、してみたよ！」
「えっ、どうだった？　意外に当たってたでしょ？」
「うん、けっこう面白いよね」
「性格診断って、今流行ってるやつ？」
松村君が聞く。
「そうそう。で、小春は何タイプだったん？」
「えーとね、兎！」
「確かに、小春っぽいわ。ちなみに、私は猫だった」
今流行りの性格診断は、性格を20タイプに分類しており、それぞれのタイプ名にはその性格に合った動物の名前が付けられている。草食系から肉食系と色々。結構、緻密にできてるらしく、その正確性が話題を呼んでいた。
「あー、それ、俺もやったことあるけど、あれまじで当たってんのな」
「そうそう、人との相性とかも結構当たるんだよね。私さ、苦手かもと思ってた人の、性格診断のタイプ知った時、あぁ、そのタイプの人とはそりゃ合わないわってなっちゃったこと何回かあるもん」

「俺もある。この前さ、飲み会で会った子がまさにそれでさ、性格のタイプ聞いたときに、本当申し訳ないけど、絶対合わないと思って、心の中で早々に壁作っちゃったわ」

松村君は、軽い口調でそんなことを話してくれる。私は、松村君のこと、全然嫌いではないんだけど、心にちょっと、靄がかかる。松村君は続けて言う。

「なんかさ、ここまで当たってると、付き合う人とか見つける時に、その性格診断の結果もとにして考えてる人がいるってのも、納得」

「まあ、確かに。効率的っちゃあ、効率的だよね」

「あーあ、俺も性格診断利用して手っ取り早く彼女見つけたいわ」

「いやいや、松村に彼女はまだ早いと思うなー」

松村君は意外と鈍感。里奈ちゃんは、多分松村君のことが好きだと思う。私は、過剰に人の顔色を伺ってしまう性格だから、人の気持ちに気付くのが得意らしい。里奈ちゃんは、私と違って、社交性もあって、明るくて、行動力もあって、私みたいな決して面白いとも言えないような子にも声を掛けてくれる優しい子。入学して間もない頃、１人ぼっちで教室に座ってた私に、里奈ちゃんの方から声を掛けてくれた。そういう勇気を私は持ってない。私は、里奈ちゃんのそういうところを、尊敬してる。こんな近くに、とっても素敵な彼女さん候補がいるのに、気付かないなんて、松村君も馬鹿な男だなって、私は毎回思うのです。今まで、一回も彼氏なんていたことない私が、決して言えることではないんだけど。

「小野さんもさ、やっぱ、そういうのあり派？」

松村君は、私に問う。その目には、ちょっとの期待が浮かんでる。もちろん、私の答えはもう決まってた。

「うん、有りだと思うな。性格合ってる人と付き合った方が、結局長続きしそうだしね」

私は、笑ってそう答える。それはもう、完璧な程に自然な言い方だったと思う。何十年もこういう生き方をしてると、自然に上手くなってくる。自分の心の靄が強くなったのを感じた。

「やっぱ、そうだよね。未来では、そういうのが普通になってたりして」

松村君は、笑って言う。これでいい。あの雰囲気で、「私は無しかな」なんて言ってみろ。多分場の空気が冷める。あれが、あの場の最適解。自分の心の靄が強くなろうが、関係ない。私にとっては、この場の雰囲気の方が大事。里奈ちゃんのことだって困らせたくない。

「はいはい。未来の事なんか考えてないで、現実見ようね、彼女いない寂しい現実を」

「冷たっ。里奈はもっと、俺に優しくすべきだと思う！」

二人は楽しそうに会話を続けていく。やっぱ、お似合いかな、なんて思ったり。ああ、でも、ごめん、里奈ちゃん。一つ訂正します。自分の心の中まで偽善者ぶってしまう、そんなところも私の嫌なとこ。私の性格は、人の悪口とか言えないタイプらしい。でも、まあ、心の中まで偽るのは無理なので。訂正することにする。ごめんね、里奈ちゃん。私、松村君のこと、嫌いではないけれど、多分苦手です。性格診断なんかで、人との関係を考えてしまうのは何かなと、私なんかは思ったりする。松村君の性格タイプ聞かなくて良かった。この場で、私たちの相性の話なんかになったりしたら、それこそ私がこんなこと思ってるのがバレてたかも。今日も私の周りは、なぜか空気が薄いらしい。息するのが難しいなんて、私は本当に生きることに向いてないのかもしれない。

「この性格のひとは、ストレスに弱いです。ストレスを抱え込みすぎてしまう傾向があります」

たまにこういう日もあるよね。なんて、自分を客観的に見ようとして、結局失敗した。ああ、無理だ、今日は無理な日だ。大学のレポートやら色々やらなきゃいけないことは、山のようにあるけど、今日はもう多分無理。せっかくの休日。私の頭の中には、有意義な休日にするための完璧な計画があったけど、多分もう無理だろうな。だってもう、夜だし。何もせず、一日が過ぎた。私の性格の中には、計画を立てるのが好きという項目もあったな、なんてどうでもいいことを思い出した。計画を立ててしまうがゆえに、その計画通りにできない自分に自己嫌悪するらしい。なんだそれ、とことん生きるのに向いてないな。あと、なんだっけ、自分が社会不適合者な理由。1人の時間が絶対必要ってのもあったな。人と居ると疲れるからららしい。でも、ずっと一人でいるのは耐えられなくて、寂しがり屋でもあるのだとか。なんだそれ、本当に面倒くさい性格してんね、私。まあ、当たってるけど。本当、こんな自分誰が好きになるんだろう。一生孤独なのでは？　なんて、人から理解してもらえないと思っているのも性格診断通り。当たりすぎてて、もう、なんか自分から寄せに行ってる気もしてる。性格診断って、何なんだろ。誰がどうやって作ったものなのかも分かんないのに、信じてる人が結構いるのも、割と恐ろしいことでしょ。性格診断って、なんか自分の取り扱い説明書みたいで、ちょっと気味が悪い。とか、色々考え込んでしまう。あーあ、こんな誰も気にしないような、どうでもいいことを永遠と考えてしまうのも、私の性格タイプのあるあるにあったな。本当、何でも見透かされすぎてて、嫌になる。夜だからかな、こんな暗いことばかり考えてしまうのは。性格診断なんかで、その人のこと分かってたまるかって、くだらないって、投げ捨ててしまえたらいいのに。気味が悪いって思う気持ちは確かにあるけど、自分だけじゃない、私のタイプの人はみんなこうなんだって安心感もくれたりするからさ。私は簡単にこの性格診断を手放したりはできない。ああ、こんな自分が嫌。こう思うのも、ストレス。自分でストレスを作って、そして、息が詰まる。段々、縛られてく。自由に生きてる気がしない。空気が薄い。いつか溺れてしまいそう。

「ブーブー」

スマホが鳴った。深夜、急に来た連絡。それを見た時の私の気持ちは、きっと言葉に表せない。驚き、嬉しさ、懐かしさ、そして期待。期待なんか抱いてしまった自分への嫌悪感も混ざってる。

「ごめん、待った？」

駅の西口。今日の雫の第一声。白い息を吐きながら、雫はそう言った。

「ううん、そんな待ってないよ」

本当は、ちょっと待ったけど。指先は、ちょっと冷たくなっていた。でも、こう言う時は、そう言うのが当たり前。

「とりあえず寒いし、そこのカフェ入って、今日何するか作戦会議しよ」

三木雫はそう言った。

平日午前中のカフェは、まだそこまで混んでない。適当に頼んだ紅茶は、温かくて、意外と美味しかった。前に座る雫も美味しそうに飲んでいる。三木雫。私の高校時代、一番仲の良かった友達。雫とは2年

生の時、たまたま席が近くなったことがあって、そこから一気に仲良くなった。席が近くなってなかったら、きっと一生関わることのなかった人種。未だに、何で仲良くなれたのか謎。ああ、こんな相性も性格診断で分かってしまったら、それはすごく嫌だなと思う。地元の大学に進学した私と違って、県外の大学に行った雫とは、もう2年も会っていなかった。だから、連絡が来たときは、嬉しかったし、驚いた。久しぶりに会った雫は、化粧もばっちりきめていて、髪も今時のお洒落なボブになってたけど、それ以外は何も変わってないなと思う。三木雫、彼女を一言で説明するなら、多分、ぶっ飛んでる子。

紅茶を大人しく啜っていた雫は、とても神妙な顔をして、こう話し出した。

「実はね、今まで、秘密にしてたことがあってさ」

「うん、どうした？」

雫の重々しい感じと、あまりの神妙さに、私もなぜか固くなる。雫は、私の方を真っ直ぐ見て、こう告げた。

「私、今まで秘密にしてたんだけど、実は……世界をぶっ壊しちゃう力を持ってます」

「はっ⁉」

「ということで、冬の海に行こうー！」

「いや、何がということで？　意味分からん！」

ああ、そうだ。こういうところが雫のぶっ飛んでるとこだった。何考えてるかまるで分かんない、突拍子もない発言に、高校の時はかなり振り回された。

「いいから、行くの！　冬の海！　これから二人で！　なんとこれ、決定事項です！」

「決定事項か。じゃあ、しょうがない、とはならんからね、普通は。まあ、私は優しいから、付き合いますよー、冬の海」

「はい、決まり！　本当は、小春も行きたかったりして！　魅力的だもんね、冬の海！」

「いやいや、普通に寒いし行きたいとは思ってないからね。私の優しさに感謝すべきだから」

「はいはい、ありがとーございます、小春様。では、電車で一時間半。早速向かおうか」

どうやら、私はこれから冬の海に向かうらしい。高校の時も、雫の訳の分からん行動力に引っ張られて、色んな所に行かされたっけ。こんな一方的な提案にいつも付き合ってしまうのは、結局雫に振り回されるのが、楽しいなと思ってしまうから。

電車に揺られ、一時間半。駅から30分は歩いただろうか。今、目の前は、海。天気は曇り。潮風は冷たい。強く吹く風に、思わずマフラーに顔を埋める。雪もところどころ残ってる。まだ2月。全然冬だと思う。日本海側の海は、鉛色で、どこか荒々しさを持っている。波の音を久しぶりに聞いた。冬の海は、夏の海と違ってどことなく寂しい。大きな孤独を抱えてる感じ。

「やっぱ、寒っ」

隣の雫も、私と同じようにマフラーに顔を埋めてた。鼻も頬も赤くなっていて、前髪は風に飛ばされて丸いおでこが剝き出し状態だ。多分、私も同じ。

「今更だけどさ、何で海？　しかも冬なわけ？」

本当に今更だけど、聞かずにはいられなかった。
「だから言ったじゃん。わたし、世界を壊す力持ってるって」
零はさも当たり前みたいに言う。
「だから、世界をぶっ壊しちゃおうと思ってさ」
「いや、全然、意味分からんけど？」
「いや、そのー、……ごめん、小春！　私、世界をぶっ壊す力を持ってるなんて、嘘。ごめんねー、期待させちゃって」
「いやいや、最初から信じてないからね、私」
「あれ、そうだった？」
やっぱり、零は変人だと思う。私の中で、不思議ちゃんって言うのはこういう人のことを言う。
「いやさ、この前読んだ漫画がさ、壊れた世界が舞台なわけ。それで、壊れた世界って、どんなだろうって思ったんだけど。自分でさ、こう、ひゅいってやって、壊せたら一番良かったんだけどね。さすがの私でもそれは無理だからさ」
零は至極真面目な顔してそんなことを言ってるけど、言ってる内容が普通に怖い。
「それでね、一番お手軽に壊れた世界を見れるとしたら、どこだろって考えてたらさー。ここだった」
「冬の海？」
「そう、冬の海って何もないじゃん。寂しい感じ。ＴＨＥ孤独って感じ。荒れ果てた世界に一番近いかなって。世界が壊れた後の世界、人間も滅んで何もない世界。そんな世界でも海は変わらずありそうじゃん？　壊れた後の世界を一番手軽に体験できるのは、冬の海かなって思ったら、見てみたくなってさ。そんで、なぜか小春と見てみたいなって思ったの。だから、誘っちゃった！」
零は、私を見て笑う。その笑顔が、眩しくて、きらきらしてて、私はすごく嬉しかったけど、直視はできなかった。零の言ってることは半分理解できて、半分理解できない。全て理解したいだなんて思わないけど、零の目に映ってる世界を私も一度見てみたいなとは思う。
「これは、私が壊しちゃった世界ですってことにして、しっかり目に焼き付けとかないと！」
零はまた、そんな馬鹿げたことを言って、目の前の海を見た。自分が壊した世界を、目に焼き付けてる最中らしい。
「いやー、さすがに寒い。もう、帰るか。小春も目に焼き付けた？」
もう気が済んだのか、零は私にそう聞いた。
「うん、もういいよ。記念に写真でも撮っとく？」
「それ、いいね！　壊れた世界で記念撮影！」
いや、どんな設定なのとは思うけど、零が楽しそうなら、まあいいのか。私たち以外は、周りに人っ子一人居ない。だから、誰かに写真を撮ってとお願いすることもできず、自撮りしたツーショット写真には、あまり海が映らなかった。何とも微妙な写真。それにも関わらず、写真も撮れて大満足な様子の零は、もと来た道を歩き出す。私は、そんな零の後を、数歩距離を空けたまま歩く。私に背を向けたまま、零は楽しそうに言う。
「せっかく海まで来たんだから、海鮮丼でも食べて帰ろうよ」

「ふふっ、いいの？　壊れた世界に海鮮丼はさすがに無いんじゃない？」
私は、からかい混じりにそんなことを言った。
「いいの！　私が世界を壊すときは、すっごく丁寧に壊してあげるんだから！　海鮮丼は壊れた世界にもあります！」
「あははっ、それって、どんな世界！？」
思わず笑いが零れた。そんな私を振り返ることもなく、雫は前を向いて歩いてく。そんな雫の後ろ姿が、私にはやっぱり眩しくて、目が霞む。雫は、どこまでいっても雫だし、自由だ。私みたいに、何かに囚われて、縛られて生きてるような人間とは、やっぱり違う。雫は三木雫って言う生き物以外の何物でもない。20タイプのどこにも収まらない、唯一無二。そんな雫のことを、私はとても大好きで、尊敬して、友達として愛らしく思っていて、そして、死ぬほど羨ましい。私も、雫みたいに生きてみたい。もし、雫と一日だけでも入れ替われたら、そんな風に私も生きられるだろうか。悔しいけど、多分無理なんだろうなぁ。入れ替わっても、私は雫みたいには生きれなくて、外側部分が雫に変わるだけ。中身は一生私のまんま。なんとなく、太陽に手を翳すみたいに、雫の後ろ姿に手を伸ばしてみたけど、結局掴めるものは何もなくて、そのまま手を下ろした。
「ねえ、あのさぁー」
私は雫に呼びかける。
「うん？」
雫は、依然として前を向いたまま、返事をくれる。
「雫はさ、……雫はっ、……いや、海鮮丼の店なんてこの近くにあるのかなって」
雫は、そこでようやく私を振り返った。
「実はね、ここ来るときに、看板見つけたの。海鮮丼食べれそうな店の。だから、今、実はそこ目指して歩いてます！」
そういうと、雫は、また前を見て歩き出した。
「そっか、楽しみ」
ああ、いつもみたいに上手く笑えてただろうか。雫が前を向いていてくれてよかった。こんな顔、見せらんない。私は、きっと、今ひどい顔をしている。色んな感情が混ざった顔。聞けなかったな。雫は、性格診断のこと、知ってるのかなって。雫は、何それ、興味ないって、言うかなぁ。いや、案外、雫のことだから、けろっとした顔で私は何タイプだった、なんて教えてくれるかもしれない。どちらにしても、嫌だった。興味ないなんて雫の口から直接聞いたら、私はもっと惨めな気持ちになる。でもその反対に、雫も性格診断のことを知っていて、何タイプかなんて教えてもらったとしても、私はきっとショックを受ける。雫みたいに、何の枠にも当てはまらないような子でさえ、何かにまとめられると知ってしまったら、それこそ私は死にたくなって、こんな世界にもっと嫌気がさす。雫だって本当は、何かしらの悩みがあって、何か縛られてるのかもしれない。でも、そんなことは極力知りたくないなと思う。もちろん、雫から悩み相談されたり、ＳＯＳの信号なんかを受け取ったりしたら、全力で救いに行くと思うけど。ほんと、面倒くさい性格してんなー、私。本当に、世界を壊してみたいって思ってたのは、実は私の方だったりして。雫が壊した世界には、海鮮丼の他に何が残ってるんだろう。切実に見てみたいなぁ、

なんて。そんなこと思ってる私は、本当に社会不適合者かもしれない。
「こはるー！　見て、なんか晴れてきた！　これじゃ、壊れた世界とは言えないわ！」
雫の指さす方に、目をやると、いつの間にか太陽が顔を出していた。
「あっ、ほんとだ！　ふふっ、ほんと、これじゃあ、雰囲気台無し！」
二人して、太陽を見て大声で笑う。傍から見たら、きっと変な光景。今だけは、人目を気にせず笑うことができた。ああ、やっぱり太陽は眩しいな。多分、今ちょっと目が潤んでるのは、きっと笑いすぎたから。高校の時からそうだった。雫の隣は、時々すごく苦しくなるけど、息がしやすい。たまに、どうしようもなく溺れそうになっちゃうけど、雫の隣にいる時は、胸いっぱいに空気を吸いこめてる気がする。

朝が来る。また、平凡な一日の始まり。今日も大学に行って、里奈ちゃんとお昼を食べて、学校が終わったらバイトに行く。雫と会ったあの日がスポットライトを当てたみたいに輝いてた日だとすると、私の毎日はほとんど、スポットライトなんか当たらない、ＴＨＥ平凡な日々。連絡が来た時、少し期待してしまったのは、ぶっ飛んでる雫に会ったら私もまた何か変われるんじゃないかって思ったから。雫なら、私をちょっとは、こんな世界から救い出してくれるかもって思ってた。本当に、自分本位で、どこまでも他力本願な嫌な期待。結局、あれからも、私は性格診断に気味の悪さを感じつつ、自分のことを誰も理解してくれないなんて思った時には、こんな性格をしてる人が他にもいるという安心感が欲しくて、結局頼ってしまっている。私の性格は、相変わらず典型的な兎タイプのままだし、飲み会は好きじゃない。効率よくなんて生きられず、松村君のことも相変わらず苦手。だけど、一つ、ちょっと変わったことがあるとすれば……時々、ちょっとだけ考える。もし、私がこの世界を壊すとしたら、何を残すかなって。多分、私も海鮮丼は残すし、雪も海も太陽もそのまま残す。あとは何を残そうか。なんて、馬鹿みたいなこと考えてる。やっぱり私は、社会で生きていくのに向いてないのかも。でも、こんなことを考えてるってことまでは、さすがに性格診断でも見抜けないんじゃないかと思う。それさえも、どうでもいいことを永遠と考えるっていうのに当てはまっちゃうのでは？　って突っ込まれたら、私は何も言い返せないけど。でも、まあ、こんな広い世界だから、世界を壊そうと思っている人は割といるのかもしれないけど、自分が世界を壊すときに何を残そうか、なんてことを日々考えてるのは、さすがに世界に私一人くらいだと思う。まあ、他に居たとしても、私とあと一人。そんな馬鹿馬鹿しいことを考えてる時だけは、空気をちゃんと吸えてる気がする。息苦しさを感じない。もし、私に世界をぶっ壊しちゃう力があったとして、こう、ひょいって簡単に壊せる力があったとして。私が、世界を丁寧に壊すとしたら、そのとき私は何を残すだろう。海鮮丼と、冬の海と太陽と。それから、あとは、何を世界に残そうか。

羨望／池田優太郎

羨望/池田優太郎

羨望

自分の手元には二枚の手紙があった。数世代前の先祖が残した手紙と自分がさきほど書いた手紙。「２０２５年から報告」という題名のメモ書き程度の手紙だ。

『今は２０２５年だ。未来はどのようになっているのかを予想して将来見返してみようと思いこれを書こうと思いたった。未来はどうなっているだろうか。人とロボットが共存しているだろうか。ロボット技術はどこまで進んだのだろうか。

たぶん、それらの画期的な技術によって暮らしが今よりもずっと便利で生きやすい時代になっているだろう。今でさえ、数十年前と比べるとだいぶ技術が進歩して便利になっている。

いろいろ考えてみると止まらなくなる。しかし、未来はきっと明るいのだろう。自分もそのような時代を生きてみたい。

はやく、はやくその時代になってほしい。』

『今は２１２５年だ。人々の生活の中にごく普通にロボットが共存している。

一目見ただけでは、人がロボットか分からないほどの外見。そんな時代を自分は生きている。生まれた時からこのような世界で生きていたため、なんの違和感も持たないが数世代前はまた違ったようだ。数世代前の時代は今よりも若い人の人口ははるかに多く、今は働き手だった彼らの代替のロボットとして土方をはじめとした肉体労働をするロボット（彼らの身体は肉体と呼んでいいのかわからないが）や省庁で働いているようなロボットまでさまざまいる。

祖父母の生まれたころは人間と人工知能が協力して世界を回していた。人間が考えた結論と人工知能が予測するデータを判断材料にし、最終的に人間が物事を決定した。

親が小、中学生の時に現在の形の人型ロボットが誕生した。祖父母の時代にも人型ロボットはあったにはあったらしいが、完璧なものではなかった。バランスをとるのも一苦労、片足で体勢を維持するのを見たら皆大喝采というようなものだったらしい。

技術は確実に進歩しているがいいことばかりではない。自分はこの人型ロボットが誕生したことによって世界の歯車が狂い始めたのだと思う。

再述となるが今、日本の自分らの若い人の人口は大きく減少している。技術は発達したので平均寿命は伸び、高齢者の割合はかなり高くなっている。しかし、肝心の子供の数がとても少ないのだ。

世界のまわり方も数世代のモノとは著しく異なり、政界にも人工知能を搭載した人型ロボットが存在している。

彼らは私たち人間に比べ数段頭がよく、処理速度や記憶能力などは比べるのが残酷なほどに機械が優

れている。しかも、彼らには意思がある。それぞれの持つコンピュータによって導かれた答えである意見が異なっているのだ。人間と見た目も大して違わない。一見しただけではわからない。こういう表現するのは気が引けるが人間の上位互換である。

日本はこのようになっているが、世界中でもこのようになっているのかといわれると、そういうわけではない。発展途上国と呼ばれる国々はあまり生活が変わっていない。多少昔より便利になったというくらいだ。

日本、アメリカなどの技術先進国の生活様式は変わった。前々から、南北問題というものがあったが今では超南北問題という名称へと変わり、しばしば議論に挙がる。

肝心の問題に移る。人型ロボットの誕生の何が問題なのか。

ロボット自身に意思があり、人権が与えられているということだ。

意思がある、ということの何が問題なのかというと欲がある、ということである。己がしたいままに体を動かし、罪を犯すのである。もちろん、すべてのロボットがこのような行動をするわけでもないし、警察もこれを防ごうと犯罪者を逮捕する。

しかし、相手はロボットなのだ。肉体をもつ人間とは違う。

例えば、人が罪を犯したとする。裁判を通し犯した罪などで刑が決まる。重大な罪を犯し死刑ということもある。死刑と言い渡されたとしても、実際に執行されるかはまた別の話だが、執行されてしまえばその死刑囚は必ず死ぬ。死刑が執行されれば人は必ず死ぬ。

死刑囚がロボットだとしたらどうだろうか。ロボットには死刑は通用しないのである。全く無意味なのだ。もちろん、死刑なので彼らの肉体である機体は二度と通電しないように人道的な破壊がされる。人ならそこで生涯を終える。肉体無しでは意思は存在しない。その意志と似たものを持つ者はいるのかもしれないが全く同じ意思、思考を持つ人間はいない。

しかし、しかしである。ロボットの意思は肉体が完全に破壊されていても残る。

彼らの意思はメモリにバックアップされているのだ。どこかのメモリにも、インターネット上のクラウドのようなメモリにも保存されている。警察がこれをすべて見つけ回収することが難しいことは簡単に分かる。死刑が執行されたとしても、新たな機体にそのメモリを挿入すれば元通り。体は違えど本人である。

これが大きな犯罪組織の親玉のようなトップのすることだ。

人間はロボットの下位互換となってしまったのだ。昔から日本では少子高齢化が進んでいたが今はもう悲惨な状況だ。

ああ、本当に過去に戻りたい。

人間が世界の中心であった時代に戻りたい。

本当に、ほんとに曾祖父に言ってやりたい。

あなたが望んでいた未来はこんなにも悲惨な世界である、ということを。

あの時代を生きた人々がほんとに羨ましい。

未来はもっとまともな世の中であってほしい。このままでは本当にまずい。』

この手紙を読み直したのち、「2125年から警告」と題名を付け加え、二つの手紙を同じ容器缶にし

まった。

堕胎告知／和槻泉

堕胎告知/和槻泉

堕胎告知

「この契約書に同意するということで本当にいいのですね、６６６番さん」
Ａはあっさりと返事をした。
「もう一度言いますが、この契約書は死刑囚の貴方がこの実験を経て生きて帰ることができたのであれば、罪を帳消しにして釈放するという内容です。そしてこの実験の成功率は他の研究者や刑務所長が何と言っているのか分かりませんが、限りなく低いと私は考えています。さらに実験の失敗が何を意味するのか見当もつきません。６６６番さんの死だけで留まるのか、この世界が一変してしまうかすら分からないのです。親殺しのパラドックスを知っていますか。過去に遡った人間が親を殺したらその人の存在は果たしてどうなるのかというものです……」
白衣を着た眼鏡の女研究員がいつものように説明する。
「研究員さん、僕は自分がどうなっても世界がどうなってもどうでもいいんですよ。ただ僕は自分ではどうにもできない現実を受け入れて生きていくだけなんです。それに、研究員さんも実を言うと実験がしたいんでしょう？　顔に書いてあります」
研究員はＡの生歴書を読むふりをして顔を隠した。チャーミングな仕草だとＡは思った。
「分かりました、６６６番さん。最後に食べたいものはありますか？　できる限りなんでも用意しますよ」
「じゃあ、蜜の入った林檎が食べたいです」
「いいですね、私も食べたくなってきました」
研究員とＡは短く笑った。

Ａは手すりの錆びたボロアパートのトイレで産まれ、生後二十時間で背中にＡというアルファベットを刻まれた。そしてその二日後、野犬の糞尿で汚れた路地裏に捨てられた。Ａを産んだ女は、Ａが産まれるまで膨れ上がったボテ腹を妊婦フェティシズムの客に高額で売りつけ、三百万稼いだ。斡旋屋に金のほとんどを搾り取られていることを女は知らなかった。女はＡを捨ててから、男と一晩寝てフィリピンへ飛んだ。なぜ女が生後間もない赤子にＡという刺繍を施したのか、Ａには分からない。
Ａは腐乱臭の漂うゴミ袋の上で野犬に食われかけた。左手の薬指の第二関節までが食い千切られたところで、Ａの鳴き声を聞いた通行人に救われた。そこからＡは十八になるまで施設で過ごした。
Ａは施設を卒業した後、施設出身者が大半を占める建設会社で七年働いた。とび職だった。Ａは法外な賃金で安全確保のイロハも何も無い危険な仕事を蟻のように続け、休日は狭い社宅で同僚と将棋や麻雀

をして過ごした。金の使い道は最低限の食料を買う以外に無かった。暇な時は母を恨んだ。
Aが二十五歳の誕生日を迎えた日、事件は起きた。Aと同僚（51）はAの社宅で安いつまみを頼りにアルコール度数が高いだけの酒を飲んでいた。初めは仕事の愚痴から始まり、酔いが回ってくると身の上の不幸自慢で話題は埋まった。そして男はAの逆鱗に触れた。
男はAの生い立ちや施設についてしゃべり、グラスのウイスキーを仰いだ。女のように膨らんだ胸とビール腹が波打った。
気付くとAは酒瓶を男の頭に振り下ろしていた。男の頭からは石油のような真っ黒の血が沸き上がった。男は打ち上げられた魚のように痙攣し、最後は全身の肉が硬直するようにビクンと伸びて死んだ。
Aはまだ半分以上残ったビール瓶や汚れた灰皿を掴み、頭部の原型が無くなるほど男を殴った。
Aは二年間の逃亡生活を送った。その間に施設の関係者八名を殺害した。施設出身という特異な素性が加味されAに様々な精神分析が行われた。しかしAの精神状態は非常に安定しており責任能力の欠如は一切無かったと結論付けられた。また、異常的な教育による発達の遅れも一切なく、倫理感は人並み以上に備わっていることも確認された。Aは死刑を言い渡された。
この事件は国が小規模児童養護施設の実態把握を怠ったことにより引き起こされた事件であったため、報道規制により公にはなっていない。Aは実験で死のうが死刑として処理できる良質な材料になった。死刑囚が公にはできない実験のモルモットとなるのは各国の常識だった。
Aの死刑が決定して一ヶ月後、Aは看守に手錠をかけられ所長室へと向かった。死刑の日程を告げられるのだと覚悟したが、そこには看守長の他に黒いスーツを着た男が来客用のソファに座っていた。男はAと目が合うと素早く立ち上がり有無を言わさぬ口調で話した。
「初めましてで申し訳ないが、君にはタイムトラベルの被験者になってもらいたい。強制ではないができれば了承してほしい。君の生歴書を見せてもらったが、正直言葉を失ったよ。私は君に、チャンス、というとおこがましいかもしれないが、更生の機会を与えたいのだ。しかしこの法治国家で死刑を覆すには超法外的な措置が必要だ。よって君には今国が進めているタイムトラベルの被験者になってもらいたい。そして無事に生きて帰ることができた暁には君の戸籍と顔を変えて釈放する。この実験が成功すればこの国はどんな脅威にも屈しない覇権国家になる。私はね、人生の生きる意味は国の礎になることだと考えている。君の今までの人生は悲惨で同情に値する。しかし国に命を捧げない人生には決して意味などない。君の生きた証は実験の被験者となることでこの国の歴史に刻まれる。どうだね、やってくれるかい」
Aの両手は手錠で固定されている。男は無抵抗のAを見下ろしていた。
Aは自己紹介すらしない男の目を見てすぐに逸らした。
「僕の命でよかったら、好きに使ってください」
看守長はAの肩を二回叩き、「立派だ」と言った。所長室の去り際に看守長がスーツの男からキャリーケースを貰っているのが見えた。中にどれほどの金が入っているのか、Aには想像がつかなかった。Aは独房に戻され、手錠を外された。看守は「お前の人生は利用されてばかりだな」と言った。トイレ以外何も無い冷たい床に寝転び、仰向けになって天井を眺めた。隅に黒カビが繁殖したコンクリートの厚い天井がゆっくりと落ちてきている気がした。逃げ場は無かった。

「いいですか、６６６番さん。これが今から乗ってもらうタイムマシンです」
眼鏡の女研究員が指さすのは一軒家がすっぽり入るほどの球体だった。色という色は無く、表面はシャボン液のような綺麗な濁りが絶え間なく動き続けている。見ている者の思考力を脳髄の奥底に眠らせるような力があった。
「後で詳しくお話させていただきますが、実はこのタイムマシンに使われている物質を理論的に発明したのは私なのですよ。私は専ら理論専門なので、実物を見るのは初めてです」
研究員は銀色のような透明のような表面を撫で、恍惚としていた。
「凄いですよ、６６６番さん。触れているのに何も無いような感覚です」
研究員は高揚した調子でAの手を取った。Aは研究員に促されるまま慎重に手を伸ばしてタイムマシンに触れた。
「まるで重さが無いみたいです」
「鋭いですね、６６６番さん。実はこのタイムマシンに使われている主要材料、質量がないどころか、負の質量を持っているのですよ」
「負の質量？」
Aが怪訝な表情を浮かべると、研究員は罠にかかった獲物に噛み付くように口を開いた。Aが女研究員と出会い三ヶ月間で気付いたことは、どうやら研究者という生き物は自分の携わった研究の話を無知の人間にするのが好きということだった。
「そうです、負の質量です。突然ですが６６６番さん、世界で一番速いものは何だと思いますか？」
Aは施設で雷が音より先に光るのは光が音よりもずっと速いからだと教えられた。施設で学んだ数少ない知識の一つだった。
「光……ですか？」
「その通り、大正解です６６６番さん。と言いたいところですが実は違います。今現在、人間が観測している最も速いものはタキオンと呼ばれる素粒子の移動です。宇宙の膨張はもっと速いのですが、それは物質ではなく空間の膨張なので例外です」
「素粒子もタキオンも宇宙の膨張も僕にはさっぱり分かりません」
Aは研究員を落ち着けるように言った。「そうですよね、すみません興奮してしまいました」と研究員は言って、わざとらしく咳払いをした。
「ではですね、６６６番さんは先程この世界で一番速いものは光だと仰いましたが、なぜそうおもわれたのですか？」
「分かりません。直感で答えました」
「なるほど、研究の世界でも直感を信じるのはとても重要な事です。太古の発明家が『１％のひらめきが無ければ、99％の努力が無駄になる』と述べたほどです。ですが光が速い理由は直感ではなく理論で説明できます。単純に光には質量、重さが無いのです。具体例で考えると分かりやすいですね。同じエンジンを持った車が競争するとします。エンジンが同じなので車を進ませる力は同じです。違うのは車の重さだけです。では同じエンジンを持った重さ一キログラムの車と百キログラムの車、どちらが速く走ると思いますか？」

「一キログラムの車です」
「なぜですか？」
「エンジンが同じなら軽い方が速く進むからです」
「今度こそ本当に大正解です６６６番さん。物体というのは軽いほど早く進むのです。そして今まで一番早いとされてきたものは光です。ではなぜ光が世界で一番早いとされてきたのでしょうか」
「光の重さが一番軽かったからですか」
「筋がいいですね６６６番さん。その通りです。信じられないかもしれませんが、世界で一番速く移動するとされていた光には重さがなかったのです。そして６６６番さんが重要な知識を得た今、タイムマシンの仕組みについて説明します。難しい説明は全部省くので、大切なことだけお話しますね。私達が過去に行くためには光を超えるスピードで移動しなければならないのです。光の速さを越えて移動することができれば私達は原理的には過去に行くことができます。ですが私達が過去に行くことは長らくできませんでした」
「僕達に重さがあるからですか」
「６６６番さん、貴方が自由の身になったら私が物理学の手ほどきをして差し上げます。そのくらいの飲み込みが速い」
　Ａは何も返事が思いつかなかった。研究員はそんな気まずさを気にせずに話し続けた。
「私達にはどうしても重さがあります。ですので私達の重さをマイナスの重さで打ち消さなくてはならないのです。そしてその結果がこの内装です」
　研究員がタイムマシンの入り口らしき場所に手をかざすと、継ぎ目の全くなかった球体が音もなく開き、今度は真っ白な空間が広がった。煩雑な機材が縦横無尽に張り巡らされていると思っていたが内装はあっけないほどシンプルなものだった。
「もっと色々な機械が詰まっているんだと思っていました」
「本当は快適に過ごせるように雑貨などを入れたいのですが、先程言った重さの関係でこれ以上他の物質を増やすと質量がマイナスではなくなってしまうのです」
研究員は手元の資料を見ながら出発を明日に控えたＡにタイムマシンの概要や注意事項を伝えていった。
「いいですか、この前の繰り返しになりますが基本的にこのタイムマシンは全自動なので６６６番さんは何もしなくて結構です。ワームホールの出口はｘｘｘｘ州のｘｘｘｘ研究所に繋げてあるので、無事一週間前に戻れたら研究所の職員に『クロノスが来た』と言ってください、いいですか『クロノスが来た』ですよ。一週間前にｘｘｘｘ研究所の職員には話をつけてありますので、そう言えば分かるはずです。そうすると分厚い百科事典がもらえます。百科事典を貰ったらまたタイムマシンに乗ってください。あっちの職員がこちらの時間軸に帰してくれますから」
「クロノスっていうのは何なんですか」
「クロノスは太古に信じられていた時間の神様です。研究所の職員はこのタイムマシンをクロノスと呼びます」
　Ａは数個のボタンしかない無機質な空間を見渡し、神の名前を冠した乗り物は案外あっけないものなのだなと思った。

細かい説明が終わると、研究員は上司からの報告を受け「了解」と短く返事をした。
「では６６６番さん。実験の成功を祈ります」
研究員はＡの手を痕が着くほど強く握った。そして白く淡白なタイムマシンを降り、研究員は扉が閉まる直前までＡに祈りを捧げた。彼女は熱心に神を信仰していた。真っ白の空間に閉ざされ、Ａは継ぎ目の無くなった壁の奥に両手を握った研究員の姿を想像した。
地鳴りのような轟音とともにタイムマシンが動き始めた。音とは裏腹にタイムマシンの中は不気味なほどに安定していた。振動も移動しているという感覚も無く、轟音が間延びするように甲高くなり、ついに聞こえなくなった。鼓膜を細かな振動が刺激していることだけが分かった。タイムマシンはワームホールを一直線に進み、空間と時間の因果を破り始めた。空間の収縮は限界を超え、時間は逆行した。世界は特異点の存在を発見し、因果律を正した。

気がつくとそこは白い空間だった。タイムマシンの中かと思ったが、違った。そこには果てが無かった。Ａが重い体を起こそうとすると激しい目眩と頭痛がした。頭を思い切り金槌で殴られている気分だった。Ａはしばらく横たわった。真っ白の地面は冷たくも熱くもなかった。熱い、冷たいと感じるのは熱の移動によるものだと研究員が言っていたのを思い出した。ぬるま湯に浸かっているようだった。
何時間寝たのか分からないが目眩と頭痛は消えた。Ａは茫漠と広がる何も無い真っ白の空間を三百六十度見回した。景色は一切変わらなかった。そこには永遠に広がり続ける粛然とした空間があるだけでＡは方向感覚を失った。そして次第に地面が消え、重力に逆らい体が空中を漂い始めた。
「もう重力を忘れてしまったのですか」
見上げると見慣れた眼鏡の研究員がいた。研究員は白衣のポケットに手を入れ、重力を無視してコウモリのように逆さまに立っていた。白衣はひっくり返らず、厳粛な気配を漂わせている。
「この空間は観測されなくなった物は消え、反対に観測されたものは生まれます」
研究員は背中から落ちた猫のように体を捻り、無駄なく着地した。研究員がポケットから手を取り出してＡの手を取ると浮いていた体は地面に叩きつけられ、Ａは尻餅をついた。
「今貴方は私が地面に着地したのを見て、地面と重力を想像しました。この世界では想像も立派な観測です。よって貴方の世界に地面と重力が生まれました」
研究員は自分の知識を自慢するような口調だった。
「研究員さんがなぜここにいるんですか？　それと、ここは一体どこなんですか？」
「そうですね。まずは私がなぜここにいるのかという質問に対してですが、答えはタイムトラベルを試みたからです。そして気付いたらこの空間にいました」
Ａは困惑した。タイムマシンに乗ったのは自分であり、研究員は実験失敗の可能性を一応ではあるが訴えていたからだ。Ａは何が起きているのかさっぱり分からなかった。
「違います、タイムトラベルをしたのは僕です。研究員さんは僕の後にタイムトラベルをしてここにやってきたんですか」
研究員は急に思案するように細い指を形の整った顎に置き、しばらく黙った。眉間の皺がＡの言葉を反芻していることを示していた。Ａは次々に湧く疑問を一旦腹の底に留めておくことにした。

「貴方は私を知っているようですが、私は貴方を知りません。恐らくですが、私と貴方は別の世界の人間なのでしょう。パラレルワールドというやつです。貴方の知っている私は私ではありません。私は貴方から見たら平行世界の人間です。そして私も貴方も別々の世界でタイムトラベルをした。その結果、実験は見事失敗し、二人ともこの真っ白な世界に迷い込んでしまった。というところでしょうか」

研究員は人差し指を額の前で伸ばし、自説を語った。

「じゃあ貴方は僕の知っている研究員さんではないんですね」

「残念ながらそうです」

「そうですか……」

研究員の顔はパラレルワールドとはいえ全くの同じ顔をしていた。目の下のほくろや丸眼鏡までもが同じだった。Aは研究員の姿をまじまじと見つめ、どこか相違点がないか探したが無駄だった。白衣の染みでさえ同じような気がした。

「あの、答えたくなかったら答えなくていいのですけれど、貴方は向こうの世界で何か法に触れることをしたのですか？」

研究員はAの姿をじっと捉えた。彼女に逃げる素振りは無かった。Aは観念したように告げた。

「はい、僕は死刑囚です。九人殺しました。そしてタイムトラベルの実験が成功したら釈放してやると言われて実験体になりました。でもなんで僕が死刑囚だとわかったんですか」

研究員はクイズに正解した子供のような笑みを浮かべていた。

「いえ、別に死刑囚だと思ったわけではありません。ですが着ている服が囚人服のようだったので、何か法に触れることをしたのかと思っただけです」

Aは自分が着ている薄いオレンジ色のつなぎを確認した。Aは自分でもわかるような常識が欠落しているところも元の世界の研究員にそっくりだと思った。

「また不躾に質問するのは恐縮ですが、なぜ九人も殺めてしまったのですか。すみません、私という生き物は一度知りたいと思ったことを放ってはおけないのです」

全く申し訳なさそうではないが、Aは頭を下げられたので自分の身の上を話すことにした。

「そうですね。九人も殺してしまった理由には僕の生い立ちが関係しているので、まずはそこから話しますね」

Aが胡坐をかくと、研究員は体育座りをした。

「僕は産まれてすぐ母に捨てられました。野犬しかいないような路地裏に。そして見ての通り左手の薬指を半分を犬に食べられました」

左手をパタパタと振ると、研究員は興味深そうに眺めた。

「不便はないのですか」

「小さい頃自分だけリコーダーが弾けなくて、それが悔しくて皆のリコーダーを庭のあらゆる場所に隠したことがあります」

研究員は手で口を隠して笑った。

「僕は薬指を食べられた後、施設に拾われて、そこで育ちました。仲の良い友人もできて、結構幸せだったんです。リコーダーは吹けませんでしたし、母に捨てられた悲しみはありましたけど。それで十八に

なったら施設を出て建設会社に勤めました。そこには施設出身の人が沢山いたんです。身寄りのいない人達ばかりが働いていました。でもある日、施設が人身売買をしていたことを知ったんです。僕の上司が酒で口を滑らせました。僕の上司は施設と建設会社のパイプ役で僕達を法外な値段で働かせていたんです。その時、僕の母も施設出身ということが分かりました。施設で育った女児は風俗店に売られるそうです。僕の母も例にもれず売られました。そして僕を産んで捨てたんです。そして母と同じ施設に入れられて、また利用された。僕は巨大な渦に巻き込まれている小さな歯車の一つに過ぎないんだと思いました。でも他の子達にはこの身勝手な渦から逃げ出してほしいと思ったんです。結局は何かの小さな歯車であることは変わりないけど、自分を利用するような奴が勝手に作った渦には嵌ってほしくなかった。だから僕の上司を含めた施設の重鎮を二年で九人殺しました……というのは多分建前です。殺す前は本気でそう思っていました。でも殺して初めて、母が施設出身だと知って安堵している自分がいることに気付いたんです。僕はただ、母が僕を捨てた理由が欲しかっただけなのかもしれません」

研究員は何か話そうと口をひらきかけてやめた……ようにAには見えた。Aは配慮に欠けた研究員の言葉をどこかで期待しすぎていたのかもしれない。

長い沈黙が流れた。景色を欠いた殺風景の空間が気分の重さを曖昧にしていることが救いだった。この世界には命を削るほどの夢も不確かな未来も希望的観測もうすら寒い絶望も、何もかもが無く、あるのは一掬の夢想と忘却だけだった。

研究員は眼鏡をかけ直した。そして目を閉じて手のひらを胸の前にかざすと、プラスチック製のゴミ箱が空中から生まれた。

「ゴミ箱……ですよね」

「そうです。ゴミ箱です」

「ゴミ箱が何だっていうんですか」

Aは研究員の言いたいことが全く分からなかった。研究員はAの反応を慎重に窺ってわざとらしい笑みを浮かべた。不特定の誰かに降りかかる不幸を少し拭ってくれるような笑顔が彼女の美点だった。

「貴方のお母さんが貴方を捨てた理由も、これまで貴方が抱えてきた葛藤や不安も私には分かりません。私には人を慰めることも気の利いたことも言うことができません」

……。

「ですが、貴方と私がなぜこんな寂しい場所に来てしまったのかは説明できます。この場所は世界の因果律を犯した者が辿り着くゴミ箱のような場所です。世界の事象には結果とそれを引き起こす原因があります。私達はタイムリープをすることで原因があり、結果が生じるという因果律を破ってしまったのです。いわば私達は世界から無用の烙印を押された厄介者です。貴方は茫洋たる世界を規定する法則に背いてここにいるのです。そう考えるとお母さんに捨てられたことなど些末なことのように思いませんか」

研究員は自信たっぷりに力説した。Aは説得するような研究員の声を初めて聴いた。Aは彼女の言葉に何か重要なことが隠れているのだと信じ、彼女の紡いだ言葉を繰り返し頭の中で唱えて咀嚼し、結論を出した。

「思いませんね」

「ですよね」

研究員は照れくさそうに耳を触った。
「でも、因果律を破ることってそんなに駄目な事なんですか、僕達がここに閉じ込められるくらい」
研究員は気持ちを立て直すように一つ咳払いをして話し始めた。
「そうですね、量子力学の世界では因果律が曖昧になることはあるのですが、決定的な因果律の破れは基本的に観測されていません。それに私が専門にする物理学ではこの世界は一つの法則があり、その数式に変数を入れれば全ての事象は理解できるとされています。つまり世界には因果律があることが基本なのです」
「難しくてよく分かりませんがその因果律というのは世界のルールみたいなもので、それを破ってしまったから僕達は捨てられてしまったということですか」
「その通りです。因果律の破れを示す有名な思考実験があります。親殺しのパラドックスというものをご存知ですか？」
Aは研究員が前にそんな話をしていたことをぼんやりと思い出した。だが目の前の研究員とその背景にある白い空間を見ていると、全てが朝霧のように消えてしまう。
「いや、知りません」
「では説明いたしますが、あくまでこれは思考実験であり、あらゆる可能性を模索するための問題だということを念頭においてお聞きください」
Aは短く頷いた。
「もしも私が自分の生まれる前の時代にタイムトラベルを行ったとします。私はタイムトラベル先で自分の親を見つけます。そして私はふと考えるのです。もしも今私が自分の親を殺めたら、自分の存在はどうなるのだろうかと。私が存在しているのは親がいるからです。もしも今親を殺めてしまったら、自分という存在が生まれた原因がなくなります。親を殺めてしまうと、自分という結果だけが残り、原因が無いという状態になるのです。これが因果律の破れです。この思考実験では様々な憶測が飛び交いました。まずそもそも過去に行くこと自体が不可能であるからこの思考実験自体が答えの無い問題であると言う説や、世界の因果律の影響で何らかの効果が働き親を殺めることができないという説、親を殺めたとしてもその他の事象が少しずつ補い合って同じ未来を辿るという修正論などがありました。そしてその中のシナリオの一つにタイムトラベルを行った者は過去には行けず世界からはじき出されるという主張もありました。世界の物質やエネルギーは因果律という法則に従って動き、一定時間例外的な振る舞いをした物は消されるという確定理論の基となる考え方です」
Aは遠近感も常識も無い空間が世界の法則を破った者の末路だとするならばすぐに納得できた。
「この世界がどういう場所かは分かりました。でもここって想像し物が自由に作れるんですよね。だったらこの世界から元に戻るマシンも作れるんじゃないですか」
Aは恐らく無駄であろうことを話した。
「私もそう思い、試してみたのですが上手くいかないのです。ここで生まれた物が形を保っていられるのは観測している間だけです。つまり想像をやめた時点で消えてしまうのです。先程私が作ったゴミ箱、もう無くなっていますよね」
Aは周りを見渡したが跡形もなくすっかり消えていた。

「それに想像したものが生まれるといっても、相当具体的にイメージをしなければいけません。試しに何かイメージして見てください」

Aは眼を瞑り、必死に頭の中の記憶の欠片を寄せ詰めて凝縮した。Aの目の前に真っ赤な林檎が一つ浮かんだ。

研究員は感嘆の声を上げた。

「凄いですね、初めてなのに結構綺麗にできていますよ」

研究員は右手に包丁を想像し、ストンと林檎を真っ二つにして断面をAに見せた。

「いいですか。イメージしたものが生まれるというのは、言い換えればイメージしていないものは生まれないということです。現にこの林檎には子孫を残すための種も芯もありません。蜜の詰まった果肉しかありません」

林檎の果肉はよく見ると中心に淡い夕焼け色の蜜があるだけの短絡的な見た目だった。確かにAは林檎の中身まで想像していなかった。

「私も過去にタイムマシンを想像しましたが、上手く作動しませんでした。恐らく機能を想像するだけでは不十分なのです。しっかりとした仕組みをイメージできていないものは生み出せません。試しにこの林檎を食べてみてください」

研究員は二分の一に切られた林檎をAに渡し、残りの林檎を齧った。爽快な音が白い空間に吸い込まれた。Aは自分の生み出した林檎を齧った。自分の一部を食べるような奇妙な感覚だった。

「甘すぎますね」とAは言った。

「それはイメージする時に甘みを強く意識しすぎたのです。林檎ですら満足に想像できないのですから、タイムマシンのような叡智の結晶は当然作り出せません。結局人間の想像力などというものはちっぽけなものなのです。ですから私達は恐らく一生この世界から出られません」

「一生って、ずっと世界に閉じ込められるってことですか？」

「その通りです」

研究員は嬉しそうに頷いた。

「何で笑ってるんですか」

研究員はまずいといった表情で咀嚼を止めて口に手を当てた。そしてAの顔を覗き、観念したように自身の身の上を話した。

「実は私、この世界にやってきて百三十三年経っているんです」

「百三十三年？」

「そうです、一回眠って起きたら一日というアバウトな数え方ですが」

「信じられない、こんな真っ白な空間で百三十三年なんて、気がおかしくなってしまいます」

「確かに、最初の数か月は本当に気が狂いそうでした。とにかく人に会いたくて、貴方と同じように重力すら忘れてしまうこともありました。一人でこの空間にいるというのは人間には耐えられません。だから気が狂う寸前、元の世界の人の夢を見るようになりました。脳が孤独に耐えられるようにコントロールしていたのでしょうね。次第に夢を見る頻度が増えていきました。そして毎日夢を見ることが普通になったある日、おかしなことが起こったのです。もう目は覚めているはずなのに、夢の中の景色が終わ

らないのです。私は両親の家にいました。お母さんが目玉焼きとドレッシングのかかったサラダをテーブルに並べて、お父さんがリビングのソファで爪を切りながらニュースを見ているのです」

Aは彼女の孤独に同情するとともに背中が泡立つような感覚を覚えた。

「研究員さんが毎日夢で見ていた両親がこの世界に創られたってことですよね」

「そうです。この世界では具体的な想像さえすれば命すら創ることができます。まともな神経でできることではないですが」

研究員は一匹の三毛猫を胸の前に創ったが張りぼてのように背中から落ちた。随分と軽い音がした。

「こんな風に生き物を想像しても意思を持って動きません。私自身あの時、自分がどういった精神状態でどれほど緻密な想像をしていたのか思い出せないのです。……今ではもう夢も見なくなりましたが」

「寂しくなくなったんですか」

「いえ、……時間というのは恐ろしいものです。段々と夢に出てくる両親や知人の顔が歪んでくるのです。画質の悪い監視カメラを確認しているみたいに、輪郭や顔の配置が少しずつ分からなくなっていって、最後は全くの他人になって私に話しかけてくるのです。私はそれが本当に怖かった。声も、香りも、表情も私を試しているように感じました。『私を覚えているか』って。もう私の中では皆他人になってしまったのです。だからもう両親や知人のことは思い出さないようにしています」

「僕には元々思い出すものなんてないので羨ましいです」

研究員は笑顔とも困り顔ともいえない表情で返答した。彼女の真意は百年以上孤独で生きた人間にしか分からなかった。

「私は貴方がこの世界に来てくれて嬉しいのです。貴方が私の想像で生み出したものではないと祈るくらいに」

研究員は両手を白衣のポケットに入れ、ビー玉くらいの大きさの硝子球を両手いっぱいに作り地面に落とした。滑稽なほど脆い硝子球がバラバラ砕けて、破片が少しずつ数を減らしていく。Aは僅かな残り火を見守るように透明な破片を観測し続けたが呆気なく消えた。

「じゃあこれからよろしくお願いします。多分永遠に」

研究員はやはり嬉しそうに笑った。

一年後

Aは螺子と木材とドライバーを創造して本棚を作った。螺子のイメージが何度も途切れ、木材が何度も瓦解した。Aは本棚の完成図を頭に思い浮かべることで道具の観測をし続けた。シンプルなデザインの本棚に表紙の無い本が並んだ。完成から一分二十二秒でネジが消え、バラバラになった本と木材が連鎖的に消えた。

「そうだ、私達が因果律に忠実になれば元の世界に戻れるかもしれません。この世界は因果律を破った者が行き着く場所です。ですからもう二度とタイムトラベルなどしないと誓うのです。そうすればきっとこの世界から脱出できますよ」

「もう二度とタイムトラベルなんて愚かなことはしませーん！　なので元の世界に帰らせてくださーい！」

……。Aの情けない声がこだませず白くなって消えた。

「何も起こらないですよ」
「やっぱりですか」
Ａは林檎を二つ創造し、一つを研究員に投げた。また蜂蜜のように甘い林檎だった。

十年後
「そういえば、貴方のお名前は何というのですか。聞きそびれる間に三千八百二日が経ってしまいました」
「僕の名前は６６６番です」
「囚人番号ですか」
「いえ、僕の世界の貴女が付けた名前です」
「変な名前を付けるのですね」
「タキオンという素粒子の素粒子番号だそうです。僕の世界の研究員さんはタキオンという素粒子を中間子と結合させて結晶化する技術を発案したらしいです。何度も自慢されました」
「なるほど、タキオンを物質にして光速を超えたのですか。我ながら素晴らしい発明です。ですがそちらの世界では世界が小さなセルでできていることをまだ知らないのですね。地球のセル情報のアーカイブから過去の情報を入手して上書きすれば楽なのですが。あそこで私のセル情報だけ固定したのが失敗でした。私という観測者がいることで因果律が崩壊してしまった。まあどちらの世界の私も失敗したので引き分けですね」
Ａはワインを研究員に渡し、研究員はワイングラスを創って注いだ。味気なかったので二人で桜も散らせた。花吹雪が舞って、真っ白の世界に一滴のピンク色が滲んだ。二人で倒れるまでワインを飲んだ。

百年後
ポカーン。ザザ、ざ。ポカーン。
「昔から疑問だったのですが、私達は観測対象に含まれないのでしょうか。この世界は観測すれば何でも生み出せますが、逆に観測しなければ消えていきます。私達は例外的に消えないのでしょうか」
ポカーン。
「自分が自分を観測しない状態なんてありえますか」
ザザザザ、ざざ、ザ。ポン。
「６６６番さんは寝ている時自分を観測しているのですか？」
「確かにそうですね、してないです」
Ａは大きく振りかぶり、テニスボールを思い切り叩いた。ボールはつまらない軌道を描いてネットに捕まった。研究員は退屈そうにため息をついた。
「流石にヘタすぎです」
「すみません」
二人はテニスコートの縦半分を使い、短いラリーをした。
「施設では神様がいると習いました。この世界を神様が見ているから僕達は消えないんじゃありませんか」
ポカん。……とっ。

研究員はラリー途中のテニスボールを左手で鷲掴みにし、熟れたトマトにして齧った。
ベチャ。
「神様なんぞはクソくらえです」
研究員はもう一つトマトを創造してAに渡した。
ガジュリ。ベチャ。
何度もトマトを創って真っ白な空に投げた。
ベチャベチャベチャベチャベチャベチャベチャベチャベチャベチャベチャベチャベチャ。

千年後
「もしもし、６６６番さんですか」
耳のコップから糸の振動が伝わる。コップの中で声がどもった。
「はい、そうですが。脱出の案でも思いつきましたか」
「もちろんです。毎日一つは思いついていますから」
「どんな案ですか」
「とりあえず一服しませんか」
「そうしましょう」
何も話さず八十二本吸って眠った。糸電話は消えてもう二度と創られなかった。

一万年後
「私達が生まれた意味について考えました」
「そんなのありませんよ」
「そう、ないのです！　なので好き勝手すればいいのですよ！」
ピザをフリスビーにして遊び、チョコレートをばら撒いて犬のように這いつくばって食べた。毎日違う猫を創って可愛がった。

百三十七億年後
「幸せですか？」
「結構幸せだとおもいます。貴女もいますし」

チョコレートの告白／大木田悠琢

チョコレートの告白/大木田悠琢

チョコレートの告白

二月十四日、それは世間の女子が皆湧き立つ特別な日。好きな人に、それぞれの想いを込めたチョコをプレゼントする。それが友チョコだろうと義理チョコだろうと、そして本命チョコだろうと、受け取った人もあげる人も心が躍る。

僕はそんな文化と、全く縁がない。そう思っていた。

「チョコ、チョコなら、トーア♪」

耳に繋いでいたイヤホンから、チョコレートで有名な「トーア製菓」のＣＭソングが流れてきた。ユーチューブの広告が入ったらしい。

「バレンタインデーに、特別なチョコをどうぞ。オリジナルキット発売中！」

聞いたことのあるような女優の声がそう告げる。スマホはズボンのポケットにしまってあるから、映像自体は見られない。スキップを押すのが面倒くさかったので放っておいたが、すぐに次の曲が流れ始めた。

今は学校から家へ帰る道すがら。僕は校内にある部室棟の前を歩いていた。この高校の部室棟は文化部用と運動部用との二つの建物から成っていて、すぐ近くがグラウンドになっている。

ふと腕時計を見る。時間は午後６時５０分を少し回ったところ。せっかく部活が休みの日だったのに、委員会の仕事で遅くなってしまった。

早く帰って明日の予習をしたい。そう思って僕が、歩く速さを少し上げた時、

「あ！　純～！」

僕を呼ぶ声が聞こえた。

声の聞こえてきた方を見上げる。部室棟二階の窓から、見知った二人が顔を覗かせていた。

「美胡に玲奈」

クラスメートの女子、美胡と玲奈だった。

「純、ちょっと来てくれない？　二階の、サッカー部の部室」

「鍵開いてるから」

二人が僕に大声で言う。

「えぇー」

言葉ではそう言いながらも断る理由はない。僕は部室棟へ入って行った。

「チョコがね！」

「入れ替わったの！」
僕がサッカー部の部室へ辿り着いた途端、美胡と玲奈がそう訴えた。
「ちょ、ちょっと落ち着いてよ」
僕は部室へと入る。
部室の中は至って普通。若干男臭がするのは否めないが、それも、置いてある消臭剤のおかげでゼロに等しい。サッカー部にはマネージャーがいるから整頓もこまめにしてあって、清潔な印象すら与える。
「まあ座ろうよ。話はそれから聞くからさ」
なぜか呼ばれた僕の方がパイプ椅子を取って差し出し、僕たち三人はとりあえず腰を下ろした。
部屋の右と左にロッカーが並んで、真ん中にはテーブルとパイプ椅子が数脚置いてある。そしてそのテーブルの上には、二つ箱が置いてあった。部室の入り口に立って見て、テーブルの右端に一つ、テーブルの左端に一つ。
右端の方の箱には、みんな大好きなチョコ菓子「キットカット」がたくさん詰められていた。箱の下には、『マネージャー一同より　どーせもらえないんだから笑　一人二つずつ取ってね！』と書かれた紙が挟まれていた。
「『笑』って……。部活した後にこんなこと言われたらたまったもんじゃないな」
そして左端の方の箱。こちらは、ハート型をしたピンク色の箱だった。リボンも丁寧に結ばれていて、明らかに『本命』を感じる。
「これって、誰から誰へのチョコ？」
「いや、それも分かんないんだけどね」
僕が尋ねると、美胡が言った。
「純を呼んだ本題は、また別なのよ」
「別って？」
「状況は分かったでしょ？」
お次は玲奈。
「テーブルの上に、サッカー部のマネージャーが用意したチョコと、誰かが置いたハート形のチョコがあって、その真ん中が空いてる」
「そうだね」
「私たち二人して、ここの間にチョコを置いたの」
「チョコ？　あ、そっか、二人とも」
ふいに二人の視線が鋭くなって、僕は思わず肩をすくめた。
実は、この二人はサッカー部とは関係がない。選手でもマネージャーでもないのだが、前々から二人にはある噂が立っていた。
サッカー部にはイケメンと名高い二人の選手がいる。新汰と智史、サッカーの力量も高い二強。そして、美胡と新汰、玲奈と智史、この二組が両思いだという噂が立っていたのだ。
美胡と玲奈は二人とも顔立ちはいいから、イケメンと結びつくのも自然の摂理というものだ。だが、二人はまだ、その関係を公には公表していない。

「いい？　このことは絶対に誰にも言わないでね」
「ほんとマジで。噂流れてるのは知ってるけど、それがみんなに知られると面倒なんだから」
「わかったわかった」
二人が僕に詰め寄り、僕はそれをうまく宥める。
「私たち、フツーの友達には話したりしないから。同じ吹部の純だから話してるんだからね」
美胡が念押しする。そんな彼女のカバンには、ホルンのキーホルダーが揺れていた。
何を隠そう、美胡と玲奈は僕のクラスメートでもあり、吹部、つまり吹奏楽部の仲間でもあるのだ。美胡はホルン、玲奈はクラリネット、そして僕はチューバだ。
「わかってるって」
「じゃあ本題行くわよ。これ見て」
玲奈がそう言って、美胡と二人してスマホを開いた。
「さっきアップされたばかりのインスタのストーリーなんだけど」
二人が同時に僕の目の前にスマホを突き出す。
「『アラー』に『サトシ』、どちらも新汰と智史のインスタじゃん」
美胡のスマホには新汰の、玲奈のスマホには智史の、最新のインスタグラムの投稿が映っていた。
「いやそれはわかってるんだけど、問題は写真よ」
「写真？」
よく見ると、新汰も智史も飾られた小箱を手にして、誇らしそうな恥ずかしそうな笑顔を浮かべていた。この笑顔から察するに、中身は、
「チョコでしょ、これ。どうかしたの？」
「そうなんだけど、逆なのよ」
「逆？」
美胡と玲奈は顔を見合わせてすぐに、
「智史くんが持ってるチョコ、私が新汰に作ったやつなのよ」
「新汰くんが持ってるチョコ、私が智史に作ったやつなのよ」
と、同時に言った。
「へッ？」

「なるほどね～。美胡は新汰に、玲奈は智史にチョコを作って、今日、このサッカー部の部室に置いたけど、なぜか取り間違いが起こったってことだね」
テーブルの上には、変わらず二つのチョコレートの箱と、美胡と玲奈のスマホが置かれている。そのスマホには、それぞれの想い人の、チョコを持ったインスタグラム投稿が映っている。
「そうなの」
「けど、それをどうして僕に？」
僕は単純な疑問を投げかけた。
「だって純、ミステリー好きでしょ」

美胡がなんの躊躇いもなしにそう答えた。
「いや、そうだけどさ」
「コナンも全巻持ってるし、金田一少年の事件簿……だっけ?、それもほとんど持ってるって言ってたじゃん」
「あと小説も。ミステリー関係の漫画とか本だけでも千冊くらいになるんでしょ?」
「いや、そうだけど……」
それと、本当に推理ができるかはまったく別物なのだが。
「話聞くだけでもいいからさ、お願いだよ〜」
玲奈がわざとらしい声を上げた。
「はあ」
僕も大声でわざとらしいため息を返した。
「で?　大丈夫なの?」
「何が?」
「何がって、間違ってチョコ取られちゃったんだよ?　食べられてもいいの?、二人とも」
「それなら」
美胡は答える代わりにスマホを操作して、インスタグラムのメッセージのやり取り画面を見せた。

『ごめん!　チョコもう食べちゃった?』
『まだだよ　智史と一緒に食べようと思ってたんだけど、なんかあった?』

「ご覧の通り。だから間違って取ってること教えて、智史くんと交換してもらったの」
「私も一緒。新汰くんと交換するよう頼んだ」
「あの二人も仲良いから気にしてないみたい」
「ならよかったね」
「よくないわよ。問題は、どうして取り間違いが起こったのか、っていうこと」
玲奈はそう言って、自分のカバンからルーズリーフを一枚取り出すとシャーペンで図を描き出した。
「右端にマネージャーの、左端に誰かのチョコが置いてある」
玲奈は、テーブルを模した長方形の右端に四角で囲んだ『マネ』を、左端にハートの形を描いた。
「ここまではオーケー。それで、私たちはチョコをこんなふうに置いた」
玲奈は続けて、二つのチョコの図の間に四角を二つ書き、左端のハート側から順番に、『み→あ』『れ→さ』となるように四角の中に書き込んだ。
「私から新汰、玲奈から智史くんへ作ったチョコってことね」
「そう。私たちはこんなふうに置いたはずなのよ」
僕もその図を見た。今日、この部室のテーブルには四つ、チョコが並んだということだ。
「もう一度、二人が用意したチョコを確認していい?」
「もちろん」

美胡と玲奈はまたスマホに例の写真を映した。
まず、智史が持っている、美胡が新汰に用意したはずのチョコ。こちらは緑色の包装紙で包まれている。そのリボンと結び目は至ってシンプルだ。
「私は全部手作りよ」
「なんかそんな感じするね」
「包装紙とリボンは百均だけど、チョコの方は、少し高めのチョコ使って作ったの」
「へー」
「何その興味なさそうな声」
「いやいや、そんなことないよ、はは」
美胡の追撃をうまく交わしながら、お次のチョコ。
こちらは、新汰が持っている、玲奈が智史に用意したはずのチョコ。こちらは青色の包装紙で包まれている。さらに、やけに綺麗なリボンが結ばれていて、そのリボンには洋風な筆記体のアルファベットが数文字書かれていた。
「これは……『トーア』って書いてあるの？」
「そうよ。トーア製菓の、オリジナルチョコキット。私、料理ちょっと苦手だから、キットのレシピに沿って作ったのよ」
「へー」
「も、もちろん、工夫したわよ！　チョコには『さとしへ』って書いた板チョコもつけたし、他にも」
「別に聞いてないから大丈夫だよ」
キットを使ったから他のチョコに劣ると思ったのだろうか。玲奈が懸命に弁論するのを、僕は落ち着かせる。
「リボンと包み紙もついてたの？」
「うん。包み紙の色を選んで買うの」
「なるほどね～。そうだ、玲奈、さっき描いてた図貸して」
僕は玲奈から図を受け取ると、そこに情報を書き加えた。

『み→あ』『緑色、全部手作り』
『れ→さ』『青色、トーアの名前入りのオリジナルキット』

「今分かってるのは、これだけ」
僕と一緒に、美胡と玲奈も図を覗き込む。しばらく図と睨めっこする時間が続いたので、僕は二人にさらに質問した。
「二人は一緒にチョコを置いたの？　それとも別々？」
「別々よ」
玲奈が答える。
「今日吹部なかったじゃん。けど私、別の委員会の用事があって、美胡と一緒にいけなかったのよ」

「だから私一人で行って置いてきて、その次に玲奈が一人で行って置いてきた、って感じ」
「時間はいつごろ？　一人ずつ教えて」
僕が聞くと、まずは美胡から答えてくれた。
「私が先だったんだけど、置きに行ったのは４時半くらいよ。ホームルーム終わって、サッカー部の部活が始まってからすぐ行ったんだから」
「確か、サッカー部は２５分始まりだったよね。荷物を部室に置いて着替えて、その時間にグラウンド集合」
「そうそう。誰もいないタイミングで部室に行ったの」
まあ、みんなに知られたくないのならそうするのも無理はないか。
「そういえば」
「何？」
「私が置いたとき、ハート形のチョコはまだなかったよ」
「なかった？」
「なかった。マネージャーからのチョコはもう置いてあったけどね」
「私の時もそうだったよ」
変わって、次は玲奈。
「私は委員会の仕事中の合間の時間に行ったから、置いた時間は４時４０分くらいかな」
「その時にも、まだハート形のチョコはなかったんだね？」
「なかった。だから、置くだけ置いて委員会に戻ったよ。……あ」
玲奈が突然声を上げた。
「何？」
「私、ハート形のチョコ置いた子見たかも」
「ほんと？」
「校舎から部室棟まで行く道って、途中に一本線のところあるでしょ？　そこをさ、女の子一人とすれ違ったの」
「どうしてその子だと思うの？」
美胡が聞くと、
「だってその子、制服と革靴のままだったのよ？　部室棟へ行く運動部の選手かマネージャーの子なら、ジャージか運動着に着替えてるでしょ」
「確かに～。頭いいじゃん玲奈」
「まあね～。だから多分、その子がハート形チョコの送り主なら、４５分くらいに置いたんじゃない？」
「そうだね」
そう話している二人を横に見ながら、僕は今聞いた出来事の時間表をも書き出していた。

４時２５分　サッカー部、練習開始
４時半　美胡、チョコを置く（この時、ハート形のチョコはまだない）

４時４０分　玲奈、チョコを置く
４時４５分　ナナシの花子、チョコを置く

「こんな感じか」
名前はあるのだろうけど今は誰かすら分からないから、ハート形のチョコの送り主は『ナナシの花子』としておく。
「そんな感じだね」
美胡と玲奈もその表を覗き込んでいた。
「ねえ美胡、次は、新汰にどうやってチョコを置いたことを伝えたのか教えてくれない？」
僕が聞くと、美胡は急に答えるのを戸惑い始めた。心なしか頬も赤くなっている気がする。
「……」
「もしかして、伝えてないの？」
コクリと、美胡が頷く。
「マジで？」
これには玲奈も驚いた。
「いや違うの、伝えるには伝えたんだけど、自分で伝えたんじゃないというか伝えたというか」
口を必死に回らせる美胡。
「その、なんというか、その、違うのよ」
「まあ、どうでもいいから教えてよ」
僕がそういうと、美胡は観念したかのように答えた。
「あのね、用務員のおじさんに頼んだの」
「はぁっ！？」

「……なるほどね。美胡と新汰は住んでるところが近い幼馴染で、その用務員のおじさんも二人と家が近くて、小さい頃から地域ぐるみの付き合いがあったわけね。
それで、そのおじさんに、新汰への伝言を頼んだ。と、こういうわけだ」
美胡は俯いたまま微かに頷いた。僕たちの立ち位置や構図は、まるで容疑者とそれを問い詰める刑事二人組のようになっていた。
「いくらなんでも、大事なプレゼントの在処を伝えるのを、人に頼むかね」
僕がため息混じりに言うと、美胡は、
「だっていざとなったら緊張しちゃって。そこに、部室周りを掃除してたおじさんに会ったから、思わず……」
「それで？　ちゃんと伝言を頼んだの？」
「もちろん！」
美胡ははっきりと答えた。
「置いた緑色の箱を指さして、これを取るように新汰に伝えて、って」
「フゥン……」

僕は美胡の答えを反芻していた。
「ちなみに、新汰は5時１０分くらいにチョコを取ったって。サッカー部は、４０分くらい練習してから休憩に入るから、その時に、部室近くでおじさんに言われたって。
純？　聞いてる？」
「ん？　聞いてるよ」
「にしてもそれはないわよー」
一方で玲奈はまだ言い続ける。
「ちゃんと言わないと～」
「そう言う玲奈はちゃんと伝えたの？」
美胡がむすっとした顔で尋ねる。
「伝えたわよ。証拠だって、ほら」
玲奈はスマホを操作すると、ラインの通話画面を見せた。

『おつかれ！　今日、バレンタインでしょ。だからチョコ作ったの。』
『まじで！　嬉しい！』
『部室に置いておくね。真ん中に置いてあるからそれ取って！』
『分かった！　今から模試の追試だから部活５０分くらい遅れて行くの。その時にもらうね！』

「ね？」
「ほんとだ。ちゃんと伝えてる」
「智史、この前の模試の時、病院行ってから来たから、英語のリスニングだけやってなかったんだよね。だから、智史がチョコを取ったのは、追試が終わって遅れて部活に来た時、５時２０分くらいだったって。それもラインで教えてくれたよー」
「へー」
「純もほら、ライン見て……って、純？」
美胡と玲奈が僕の方を見て固まる。
僕は時間表に、新汰と智史がチョコを取った時間も書き込んでいた。

５時１０分　用務員のおじさんに言われて、新汰がチョコを取る
５時２０分　智史がチョコを取る

そしてどうやら僕は、それを見ながら固まっていたらしい。けれど、それも全て、僕の頭の中で全てが一本の線に繋がった気がしたからだ。
「……」
「純？　なんか分かった？」
「……ん？　あぁ、なんとなく」

「ほんと！？」
「最後に一つ確認したいんだけど」
僕は顔を上げて二人を見た。
「二人がチョコの取り間違いに気づいたのって、サッカー部の部活が終わった後であってる？」
「あってる」
と美胡。
「サッカー部の部活が６時半に終わったから、その後で私と玲奈に、新汰と智史くんから連絡があったの。サッカー部は部活中スマホいじれないからね。
私と玲奈はチョコそれぞれで置いた後、すぐそこの喫茶店で少し話してたからさ。ね？」
「そう。ラインとかインスタ見て、二人がチョコ取り間違ってることに気づいて、慌てて戻ってきたのよ」
「なんでか考えてたら、純が通りかかったの」
「……」
そこまで聞いて、僕の頭の中で確かに全てが繋がった。……ただ一つの不明点だけ残して。
「分かったの？　純？」
「ああ。ほとんどね」
「ほとんど？」
美胡が聞き返したのに、僕は視線を逸らして答えた。その視線の先には、ハート形のチョコ。
「誰が置いたのかはともかく、誰へのチョコだったのかが分からないんだ」
「そんなこともういいわよ。早く、なんで取り間違いが起こったのか教えてよ」
「そう？」
「あ、ちょっと待って」
と玲奈。
「トイレ行ってくる。少し待ってて」
「早く行ってきちゃいな」
玲奈は足早にドアを開けると、よほど我慢していたのか、少し強めにドアを閉めた。
〝バンッ〟
〝ヒュッ〟
ドアの勢いで風の塊が吹き込んできた。テーブルの上の、マネージャーからのメッセージが書かれた紙がバサッとはためき、肌寒さに僕と美胡も思わず身震いする。
「さむっ。ってか今何時？」
美胡が時計を見て、
「えー、もう７時１５分？　まずいよ、７時半には校門閉められちゃうよ」
美胡が僕の顔を覗き込む。
「純？」
「大丈夫。玲奈が帰ってきたら、謎解きの始まりだ」
僕はさぞかし、満足げな笑みを浮かべていただろう。だって、全ての謎が解けたのだから。

「おーさむ」
玲奈が今度はゆっくりドアを開け閉めしながら戻ってきた。
「もう分かったの？　純」
「そうみたい」
美胡が玲奈を椅子に座らせる。
「さ、教えて。純」
「ああ。もちろん」
僕は微笑んだ。
「まずは、取り間違いが起こった一番の原因を伝えようか。それはまさしく、伝言ゲームの失敗だよ」
「伝言ゲーム？」
「時系列順に考えよう。まずは新汰が取ったチョコのこと。
新汰が取ったのは、本来、玲奈が智史に用意したものだったよね。そしてそのチョコの特徴は、青色でトーア製菓のオリジナルキットだったこと」
「そうよ」
と玲奈。
「何もおかしくないじゃん」
「じゃあ次は美胡に質問。美胡は用務員のおじさんに、新汰に何て伝えるように言ったんだっけ」
「だからそれは、私が用意した緑色の箱のチョコを取るようにって」
美胡が少し面倒くさそうに答えた。
「そうだったね。だから本来、新汰は緑色のチョコを取らなくちゃいけなかった。けれどそれは、用務員のおじさんという第三者を介したことで、伝言ゲームが失敗しちゃったんだよ」
「どう言うこと？」
「ここでクイズ！」
僕が突然惚けたような声を出したので、二人は少し驚いた。
「信号の色は何色でしょうか」
美胡と玲奈は顔を見合わせた後、美胡が、
「青色・黄色・赤色でしょ？　何これ、なぞなぞ？」
「正解。けどさ、青信号って、本当に青色だと思う？」
また二人が黙り込んだ。そして玲奈が、
「どちらかといえば、緑色？」
と答えた。
「でしょ？　青信号と名はついてるけど、実際は緑色だ。実は日本には昔から、緑色を青色と呼ぶ習慣があるんだよ。例えばほら、黄緑色のリンゴもみんな、青リンゴっていうでしょ」
「ほんとだ」
「ねえ美胡。用務員のおじさんって言ってたけど、その人って結構高齢なんじゃない？」
「うんそうだよ。多分、もうすぐ定年だから……あ！、もしかして！」

美胡が何か思いついた。
「用務員のおじさん、新汰に伝えるときに『緑色』って言ったんじゃなくて、『青色』って言っちゃったの！？」
「その通り」
僕は頷いた。
「高齢の人なら、『緑』を『青』と呼ぶ癖がついてただろうからね。
けど、新汰が間違った原因はそれだけじゃない」
僕は美胡のスマホの写真を指さした。……新汰が間違って取った緑色のチョコの箱についている、トーア製菓オリジナルのリボンを。
「玲奈が作ったのはトーア製菓のオリジナルキット。そこにはトーアの名前がアルファベットで入ったリボンも付いていた。
トーア。確か元の会社の漢字は、『東』に、逢うの『逢』って書いた気がするんだけど、そのアルファベット表記は、ＴＯＡだ」
僕はリボンのアルファベット表記を拡大して、二人にも確認してもらった。
「ＴＯＡ。読み方はトーアだけど、ＴＯとＡで区切ってみたら？　そして、手紙の宛名のように読んでみたら？」
美胡と玲奈は少し考えていたが、ハッと思いつくと二人同時に、
「トゥー（ＴＯ）Ａ！」
少し興奮しながら答えた。
「そう。新汰の名前のアルファベットはＡだ。トーアのアルファベットを『Ａへ』つまり『新汰へ』というふうに読み間違えたとしたら？」
「青色の箱と伝えられて、自分へのメッセージらしい文字も見つけたのなら」
「だから新汰のやつ、間違って玲奈が智史くんに用意したチョコを持って行っちゃったんだ」
美胡は「あのバカ」と言いながら納得していた。
「でもさ、ちょっと待って」
声を上げたのは玲奈。
「新汰くんが間違ったのは分かった。けど、智史が間違えるのは分からないよ。ちゃんと私は伝えたんだから、自分のチョコがないって気づいたんじゃない？」
「じゃあ玲奈。もう一度聞くね。玲奈は智史に、チョコのことを何て伝えたんだっけ」
「だからそれは」
玲奈はスマホのライン画面を開いて読み上げた。
「『真ん中に置いてあるからそれ取って』って言ったよ」
案の定、僕の推理に間違いはなさそうだ。僕はふっと微笑んだ。
「じゃ次は智史の取り間違いについて、テーブルの上の時間ごとの変化を追ってみようか」
僕はさっきのルーズリーフを取り出して裏返した。
「まず、４時半のテーブル」

テーブルを模した長方形、その右端に『マネ』と書かれた四角と、少し離して左側に『み→あ』と書かれた四角を書いた。
「もともとマネージャーからのチョコがあって、そこに美胡がチョコを置いた。そうだね？」
「うん」
「じゃ次は、４時４０分のテーブル。次は玲奈がチョコを置いた」
僕は、『マネ』の四角と『み→あ』の四角の間に、『れ→さ』と書かれた四角を書いた。
「そうだよ」
僕はそこで赤ペンを取り出した。
「見て。４時４０分にはテーブルの上に、チョコが三つあることになる。マネージャーのチョコと、美胡のチョコと、玲奈のチョコ」
ここまで大丈夫？、と問いかけると二人はうんと頷いた。
「玲奈はこの時点で智史に連絡を入れたんだろ？　だから確かに、」
僕は『れ→さ』の四角を赤ペンで囲んだ。
「玲奈のチョコは、マネージャーのチョコと美胡のチョコとの、真ん中に置いてある」
「そうだよ、だから私はそのまま智史に伝えたの」
「けどね、問題はここからなんだ」
僕は元のペンに持ち替えた。
「玲奈はチョコを置いた帰り道に、ハート形のチョコを置いただろう女子を見たんだよね」
「そうだよ」
僕は、長方形の左端にハートの形を書いた。
「つまり、これが、４時４５分のテーブル」
僕はまた赤ペンに持ち替えた。
「次にテーブルの上が変わったのは、５時１０分」
「新汰が、玲奈が用意したチョコを間違って取った時ね」
「そう」
僕は赤ペンで、赤で囲まれていた『れ→さ』の四角を斜線で消した。
「あ！」
玲奈が声を上げた。
「真ん中だったチョコがなくなっちゃった！」
「その通り。そして変わって美胡のチョコが、マネージャーのチョコとハート形のチョコに挟まれた、真ん中に置いてあるチョコになったんだ」
僕は『み→あ』の四角を赤ペンで囲んだ。
「だから智史のやつ、美胡のチョコを疑いなく取っちゃったのね」
「そう言うこと」
僕は図を二人に渡してよく確認するよう促した。
「これは、玲奈がチョコの特徴じゃなくて置き場所で伝えてしまったこと、それと、ハートのチョコが

加わる予想外の出来事が起こったこと、この二つが原因だ。
結局二人とも、伝言ゲームが下手だったってことだよ」
「……」
二人はこの説明で納得したようだ。気の抜けた顔で、お互いの顔と僕の顔を交互に見ていた。

「……けどさ」
玲奈がポツリと言って、テーブルの上のハート形のチョコを指差した。
「あのチョコがなかったら、少なくとも智史は疑いを持ったってことでしょ？」
「確かにそうね」
と美胡も同意。
「あのハート形のチョコって、結局誰へのチョコだったのかな」
「あぁ、それなら多分わかるよ」
僕は立ち上がって、テーブルの向こう側にある棚へ歩いて行った。
「リボンが丁寧に巻かれてるでしょ。きっとそれは本命チョコ。きっとあれを用意したナナシの花子は真面目な子だったんだ。だから、宛名を書いたカードか何かがあったはずだとは思ったの」
「けどなかったよ」
玲奈がテーブルの上を探して言う。
「チョコの下にも」
美胡はチョコの箱を持ち上げて言う。
僕は目的の棚を見つけると、そこを探しながら、
「この部室のドアさ、さっき玲奈がトイレ行った時分かったけど、少し強めに開け閉めすると風が入ってくるんだよ」
「そういえばそうだったね」
美胡が頷き、玲奈が「そうだったの？」と言わんばかりの表情をしている。
「その風で、マネージャーからのチョコの下に置いてある紙がはためいたんだ。それくらいの強さがある風なら、チョコの上に置いたメッセージカードくらい飛ばしちゃうよね」
「確かに！」
「好きな人のためにチョコを持ってきて、誰にも見られないようにコソコソ置いて行ったのなら、ドアの開け閉めまで気を配れなかったはず。だからきっと、その子が出て行った時に風が入って……あ」
僕の目が棚の奥に挟まったそれらしきカードを捉えた。
「見つかった？」
「誰？　誰？」
二人が露骨に興味を示し出す。
僕はそのカードを手に取って、破れたり汚れたりしないようにゆっくり引き出す。
「サッカー部の男子かな？」
「えー誰がいる？　あ、一年のあの子とか」

「いや案外二年のあの子かも」
「あーわかる。あの子人気だもんね」
二人が話している。
カードをゆっくり引き出す中で、僕の目に入ったのは漢字の部首の糸編。
「友チョコ説ない？」
「ないない。どう見たって本命チョコだもん、これ」
徐々にカードの全てが引き出されていく。
「……ねえ、ひょっとして」
美胡が僕の方を見ているのを、背中越しに感じる。
「……美胡もそう思った？」
玲奈の視線も感じる。
そしてカードの、糸編の次に見えてきたのは……。
「純へのチョコなんじゃない？」
……屯の字。

〝ガチャッ〟
「お前ら、何してんだ？」
「あ、純平先生！」
ドアを開けて入ってきたのは、サッカー部顧問の純平先生だった。
「美胡に玲奈に、純」
純平先生は僕たちを見て心底驚いたようだ。
「こんばんは」
「こんばんはじゃないだろう。あと5分で校門が閉まる。早く帰りなさい。
そもそもどうしてここにいるんだ。吹部のお前たちが」
「ちょっと用事があって」
純平先生は僕たちの数学担当でもあるから、僕たちのことは知っている。学生時代はサッカー部だったそうで、体つきも、そして顔もいいと評判だ。
「用事って、ここはサッカー部だぞ」
「だから、サッカー部に……」
「何を……あ」
純平先生は今日が何の日か思い出したようだ。
「全く……。ほどほどにしろよ」
「はーい」
「ともかくさっさと帰れ」
美胡と玲奈が帰る準備を始める中、僕はメッセージカードを手に持っていた。そこに書かれていたのは、
『純平先生へ』

ふふ、だろうな。予想通りだ。
「純、お前も帰れ。ほら、何してるんだ。帰る準備を……」
この部室に置いたと言うことは、部の関係者へ宛てたチョコということ。しかし部活が終わった今も残っているということは、少なくとも部員の中には思い当たる人間がいなかったということ。流石に、自分宛か分からないチョコを取るような無神経な男は、そうそういないだろうから。
純平先生が何か言っているのを聞き流しながら、僕は立ち上がった。
「何だよ、急に」
「先生、何で部室来たんですか？」
「今日は、部室棟の戸締り確認の当番だからな」
「それって定期的に回ってきます？」
「回ってくるよ。週一で」
なるほど。ナナシの花子は、今日を狙ってチョコを置いたんだ。確実に純平先生が取ってくれるから。
「先生。これ」
僕はメッセージカードをハートのチョコの上に置いた。
「あ！」
美胡と玲奈がそれはもう楽しそうに声を漏らした。
「僕からじゃないですよ。元からあったんです」
このメッセージカードは折りたたみ式だ。ナナシの花子なら差出人の名前も書いてあるかもしれない。
「え？」
純平先生は、照れたような困ったような、微妙な表情をしていた。

「あースッキリしたー」
部室を出て、校門までの帰り道。僕たちは三人揃って歩いていた。
「ありがとねー純」
「ほんとほんと」
二人に対して僕は、
「少し考えればわかることさ」
と笑って見せた。
「何それ、私たちがバカってこと？」
「まあ、美胡は自分で新汰くんに伝えてない分、バカだったかもね」
「なによ」
二人がまた何やら言い争い始める。それを僕はまた笑いながら見る。
「……にしても、あのチョコ、純平先生へのものだったのね」
「そりゃ人気だもんねー」
話はいつの間にか、例のハートのチョコのことになっていた。
「糸編が見えた時、純だと思ったんだけどなー」

美胡が冗談っぽく言う。
「あるわけないでしょ」
「でも、純も貰えそうだけどね」
玲奈も冗談っぽく言う。
「貰えるわけないって」
僕が根気強く否定すると、美胡と玲奈はまた二人して笑った。
「そりゃそうか……」

二月十四日、それは世間の女子が皆湧き立つ特別な日。好きな人に、それぞれの想いを込めたチョコをプレゼントする。それが友チョコだろうと義理チョコだろうと、そして本命チョコだろうと、受け取った人もあげる人も心が躍る。
僕はそんな文化と、全く縁がない。そう思っていた。

「……ね、純ちゃん」
だって僕は、れっきとした女子高校生。本気になれる恋もまだ見つからない、普通の女の子なんだから。

ひとり／杉崎環生

ひとり/杉崎環生

ひとり

「人間関係は狭い方がいい」

僕が常々考えていること。人間関係が広いほど、予期せぬいざこざに巻き込まれたり、異なるコミュニティで異なる自分を演じる必要が生じてきたり、とにかくめんどくさい。僕はそういうことを上手くこなせるほど器用な人間ではないので……。

基本的に僕は根暗で人との関わりを避けながら生きていくことを強く望んでいる人間だ。友人の数は片手に収まるくらいがちょうどいいと思っている。そもそも誰も友達になろうと寄ってこない。

そんな僕にもとても信頼している友達がいた。過去形。今はもう友達でない。保育園からの付き合いで家も近所だからいつも一緒に遊んでいた裕くん。裕くんはスポーツ万能で頭脳明晰、文武両道を具現化したような人だ。もちろん男女ともに人気が高い。こんな僕が彼と友達でいていいのかと思うほどに裕くんは輝いて見えた。裕くんさえいれば、これ以上友達はいらないとさえ思っていた。

いつからだろう、裕くんとの関係が疎遠になったのは。多分、中学校に入る前くらいだろうか？詳しい時期は思い出せないけど、気づいた頃には廊下ですれ違っても挨拶すらしない関係になっていた。ある日思い切って一緒に帰ろうと伝えたときの彼の言葉が今でも忘れられない。

「お前と関わってると周りからの評判が悪くなるんだよ。『裕さー、何であんな奴と絡んでんの？』ってこれまで何回言われたことか……。これまでは一応仲良くしている体で関わってたけど、もう勘弁してくれ。俺にはもう他に居場所があるんだ」

裕くんから告げられる言葉の一つ一つが重く僕の上にのしかかる。それと同時に僕は一抹の安堵感を覚えた。そうだよね、釣り合っていると思ってたのは僕のただの勘違いなんだよね。裕くんと僕とでは対等じゃないよね。これまでの関係は僕の想像の世界で、今やっと現実に引き戻されたんだ。元来自己肯定感の低い僕はこの現実をすんなり受け入れることができた。僕はこれ以降完全に孤独な人間になった。

高校はできるだけ中学までの知り合いが行かなそうな場所にしようと敢えて家から遠い場所を選んだ。周りに知らない人しかいない環境というのは非常に心地よかった。こちらから歩み寄らなければ、たいていの場合誰かに絡まれることはない。生徒は必ず部活に所属しなければならないという決まりだったらしいが、活動実態がほとんどないような部活にとりあえず籍を置いて、実質的に帰宅部として生活していた。特に勉学に励むというわけでもなく、漫然と日々を過ごしていた。

高校二年生の春、とある同級生の女子生徒に告白された。彼女は僕たちの学年のカーストの上位の集団に所属していて、早い話陽キャである。僕と対極の存在。呼び出されたのは放課後の誰もいない教室。

扉の向こう、僕からは見えないが廊下のどこかで彼女の仲間たちがひそひそ話をしながらこちらの様子を伺っているのが分かる。さしづめ、友達同士の遊びで負けた罰ゲームなのだろう。告白してきた彼女の顔には如何にも「やらされています」というような表情が浮かんでいる。あまりにベタすぎる。めんどくさいから早々に断って帰ろうとした時、彼女が急にその場で泣き崩れてしまった。

「酷いよ、私こんなに勇気を出して告白したのに……」

すかさず隠れていた仲間たちが彼女の元に駆けつけて、慰めの言葉をかける。これもやはりベタな展開である。そんな茶番には一切目もくれず、僕はそそくさと教室を去った。

この件について詳細は良く把握していないが、僕が彼女を振ったという事実が都合よく捻じ曲げられ噂として伝播し、僕の評判は最底辺になったらしい。「あの子の告白断るとか、どういうご身分よ笑」とか「二度とない機会なくせに勿体ないねー」とか、わざと僕の耳に届くような声で話している女子のグループがちらほら見える。どうせお前ら、僕が告白を受け入れていたら「お前なんかがあの子に釣り合うわけない」って罵倒してただろ。

それ以降、僕は完全にクラスから空気のように扱われるようになった。最初はわざとそういう態度を取っているように見えたが、次第にその態度すら自然な動きになっていた。でも、そもそも人との関わりを求めていない僕からしたらこれは好都合だ。思いがけない形で僕は最高の生活環境を手に入れた。

大学は地元の中堅大学に進学した。わざわざ実家を離れてまで学びたいことも学問に打ち込む意欲もそこまでなかった。実家通いの方が僕的には色々と都合がよい。大学という環境は非常に僕向きのものであった。高校までとは違い、特定の集団で一年間過ごすということがないから、人間関係を自分の都合で築くことができる。人と関わらないのだから、築くものなど何もないのだけれども。人からの制約を受けずに自分の時間を自由に使える最高の環境だ。一生大学生のままでいたいと強く願っていた。

その日は、普段つけているヘッドホンをうっかり家に忘れてしまっていた。いつも以上に外界の音がよく耳に入ってくる。バイト先で失敗してしまった話。遊び過ぎてレポートを出しそこなった話。最近見て感動した映画の話。僕からしたらどうでもいいような色々な情報で周囲が満たされていた。

お昼ご飯をキャンパス内のコンビニで食べていると近くの席に二人組の女子がやってきた。そのうちの一人が目を充血させて鼻をすすっている。それなりに大きい声だったから、二人の会話は自然と耳に入ってきた。どうやら泣いている原因は彼氏にフラれたからなのだとか。2か月前に相手から告白されて始まった交際にも関わらず、相手にはその後別の彼女をつくっていて、自分は捨てられたのだという。慰めていた方の女子が「あいつ、本当に最低。許せないんだけど」とフラれた女子に代わって怒りを露わにしていた。何もこんな人の集まるところで話さなくても。やっぱり、人間関係にいざこざは付き物なんだな。付き合っているときは幸せの絶頂かもしれないけど、仮に別れてしまった場合にこんなにつらい気持ちになるくらいなら、最初から恋なんてしない方がいいのかもな。そんなことを考えながら僕はコンビニを後にした。

それは夏の暑さのピークが過ぎ、季節が秋に移り変わろうとしているある日のことだった。家でテレビをのんびり見ていた僕は地元ニュースで「大学生が駅のホームで飛び降り自殺をした」という報道が流れているのを見た。歳は僕と同じらしい。それからしばらくして買い物をしに行っていた母親が帰ってきた。僕を見るなり、駆け寄ってきてこう言う。

「幼馴染の裕くんっていたでしょ？　あの子今日駅に飛び降り自殺をしたらしいのよ」

時間が止まったように感じた。アナウンサーの無機質な声で読まれたニュースと母親の口から告げられた名前が重なり合う。　動揺している息子を傍目に「あの裕くんが…あの裕くんが…」と母親は繰り返しながら目に涙を浮かべていた。僕も泣きたかった。でも涙が流れてこなかった。悲しいという気持ちに間違いはないけど、同時に自分は悲しむ権利があるのだろうかという疑念を抱いていた。僕なんかが涙を流して彼はどう思うだろうか。

絶縁を告げられたあの日以来、一切の交流がなかった裕くんに対して、僕はまだいつかやり直せるという希望を抱いていたことにこの時になってようやく気付いた。お互い成長して、あれは過去の話だと言ってまた仲良くできればなって、心の奥底では願っていたのだ。もっと早く気づいていればな、なんて後悔はするだけ無駄なことだった。

「お葬式には絶対行こうね」しばらくして母親がそう言ってきたが、そんなことは言われるまでもなかった。

斎場には色々な人が来ていた。古くからの友人、高校時代の担任や部活動の顧問、バイト先の同僚。彼がいかに周囲の人間から愛されていたのかを改めて知ることとなった。やっぱり裕くんはすごいな、僕とは正反対だ。

参列者の中には僕が知っている顔も多かった。裕くんの友達グループで僕のことを毛嫌いしていた人たち。一瞬彼らと目があった気がした。慌てて目を伏せたが、あちらの反応がどうしても気になった。「何であいつも来てるの？」「裕、嫌な顔するだろうね（笑）」そんなことを言っている気がした。周りに変な事言いふらしてる気がした。「あそこにいる奴、裕に友達の縁切られたのにノコノコ来てるんだぜ、裕絶対嫌がってるよなー」単なる自分の思い込みなはずなのに、僕は気まずさでもう顔を上げることができなかった。

結局、僕は棺の中の裕くんの顔をよく見ることもできず、彼にしっかりお別れの言葉を告げることも出来なかった。僕はただずっと顔を俯けていた。今日は裕くんに会うために来たのに、普段は気にもしないような周囲の反応に余計に気をとられていた。そうこうしているうちに棺を乗せた霊柩車は火葬場に向けて走り去ってしまった。僕はこの時の自分がどうしようもないくらい惨めで愚かな奴だと思った。

以来、僕は対人関係への拒絶感がより強まった。裕くんを超える素晴らしい人に出会えるわけないという思いもある。ただ、それ以上に別れへの恐怖心が増した。どうやら、僕は裕くんの「死」というものを自分の思っている以上に重く受け止めているらしい。出会うことがなければ、別れることはない。もうこれ以上別れるたびに悲しみに暮れるのはごめんである。これが僕の出した結論。他人との関わりでこれ以上感情を揺さぶられたくない。僕は孤独を望んだ。別に生活が何か変わったわけではない。ただ僕がそういう決意を胸に抱いただけである。

古いノートを見返して、つい笑みがこぼれてしまう。過去の自分であっても何だか恥ずかしい内容だった。よくこんなものが残っていたなと思ってしまう。何でこんなものを書こうとしたのか、今の僕には分からない。大方、何かストレスが溜まって、その発散のために書いたのだろう。

ノートには一貫して自分が孤独であるという主張が書かれていた。ただ、今の僕には分かる。過去の僕は心の底から孤独を望んでいるわけではない。本当は色んな人と関わりたかった。たくさんの友人に囲まれていたかった。でもそれが上手くいかず、悩み苦しんだ。誰にも悩みを告白することができずにいた。いつしか、そんな憧れは忌むべき対象になった。自分は孤独を求める生き方をするんだと言い聞かせて、自分をだまし続けていた。わざとらしいほどに自分の孤独エピソードだけを書き連ねているのも多分そのせいである。声をかけていたら仲良くできた人もいたかもしれない。告白していたら付き合えていた人もいたかもしれない。でも不器用な自分に失望し自暴自棄になっていた僕にはそんな人間を見つけることができなかった。

実家の元自室で一人、僕はノートを見返しながら色々なことを考える。過去の自分なら独りで色々なことを考えていただろう。僕は今「一人」だけど「独り」じゃない。階下から子供たちのはしゃぎ声が聞こえる。従妹同士久々に遊べて嬉しいのだろう。そうだ、今の僕は独りじゃない。愛すべき家族がいる。生涯孤独であることを決めていた私にも、大切にしたい人が見つかったのだ。あの時告白していたから今得られている幸せ。昔の自分は別れを恐れて、出会いを避けていた。失敗を恐れて何もできずに閉塞的な世界を生きていた。

僕は未だにいつか必ず訪れる別れについて恐怖心を抱いている。どれだけ多くの人に囲まれて生きていても死んでしまえば人はまた独りになる。でも、それでいいのかもしれない。与えられた時間が有限だからこそ、共に生きるこの瞬間が価値を持つのだと思う。人と生きる楽しさを知った僕がようやく気付けたこと。このことにもっと早く気付けていれば、僕の人生はどうなっていたんだろうと時々考える。でも気付いていなかったからこそ今があるのだとしたら気付いていなくてよかったなって結論にいつも落ち着く。

時計の鐘が正午を告げる。探し物をしていたはずが思いがけず昔の記憶を掘り起こすことになるとは。そろそろお昼ご飯だろうか。僕はノートを閉じて家族のいる1階へと降りて行った。

松に鶴、梅に鶯、その先も／桧

松に鶴、梅に鶯、その先も/桧

松に鶴、梅に鶯、その先も
桧

「前まではさ、春が嫌いだったんだよね」
キャンバスをイーゼルにかけながら、松原さんはそう言った。花を好いているこの人が、花を一番連想させるであろう季節を嫌っていたのは、私にとっては気になる話題だった。
事の発端をさかのぼる。ボタンちゃんを動物病院に連れて行った帰り道、松原さんに借りていた物をちょうど持っていたので、それを返しに家の中にお邪魔させてもらった。すぐ帰るつもりだったのに、家のドアに鍵をかけた瞬間にいじらしい雪が降ってきた。そのまま大荒れになり、降りしきる雪の道を帰るには心許ない様相の私に、松原さんは休んでいきなよと提案してくれた。ボタンちゃんの絵を描かせてあげることを条件に加えて。
松原さんは私の勤めている会社の先輩だ。部署は違うけれど、妙な縁でこうして会話をすることがある。お互い猫を飼っていることもあって、たまに自分たちの愛猫を見せつけ合う。松原さんは「猫の奴隷」を自称するくらいなので、猫を愛する私のことも快く受け入れてくれるのだ。飼い猫に対して「殿下」――本来の名前はレオくんだったはず――と呼ぶくらい、奴隷が板についている。
そんな松原さんが話し始めた春の話。花が好きで、よく木に咲く花を見に出かけると言っていたが、家には置かない主義らしい。それは猫を飼っているからというのも、松原さんの部屋の中が意外にとっちらかっているのもあるのだろう。何よりも生理的な面での問題が大きかった。
「春って花粉症が酷くなりますもんね」
「そうそう。一人だけデロデロのゾンビみたいな顔になるの。ティッシュもマスクも意味を為さないで、哀れな感染者の一人になっちゃうんだ」
「ああ、それはだいぶ辛いですね。想像するだけでも苦しい。けど、他にも嫌いな理由があるんでしょう?」
「うん。『出会いと別れの季節』って言われているのが嫌だったんだ。別に夏でも秋でも冬でもさ、人間は勝手に出会って別れるのにって」
松原さんは笑って言う。低く伸びやかな声で。この人はイベントや行事にあまり関心がない。確かにハロウィンとかクリスマスとかバレンタインも世間では盛り上がるけれど、積極的に動けるほど熱に浮かされない気持ちは分かる。どこか喧噪の地から離れて、一人で脇道を歩いて帰るみたいな空気感に酔っている。しかし、入学と卒業という私たちが通過しなければならなかった出来事が、嫌でも「出会いと別れ」を思い起こさせる。
「捻くれだと思ってもらえればいいよ。入学も卒業も、自分の目にはただ一つの『出来事』にしか見えていなかった。春は気怠いんだ、うちでも外でも」

「感慨深さは今でも無いですか？」
「無い。ずっとそういうもんだと思ってきたからさ。決まっていることなのに皆が笑って泣いているのが分からなかった。親しくなった人はいても、学生の期間を終えると疎遠になるのが普通だって考えてたから。昔から自分の嗜好や過ごし方が周りと違っていて、自分以外の反応が不安で、勝手に冷めてる。空の上から皆を見つめて、見つめ続けて、自分のことなのに脳内で映画のスクリーン上に映し出された日常を観ているような感覚で。『そういうもの』で出来事を片付けていた」
　人間との関わりに思い入れが無い。後悔も無い。だから、出会いも別れも『そういうもの』で済まして、特別なことと思わない。これは一般的とされる情景から外れた感覚なのだろう。それでも、人間の存在を気にしない松原さんも、無意識に悩みの種を植えているのかもしれない。あるからこその今の暮らしぶり。それでも、周囲の考えることと一致していたことを挙げるとするならば――。
「桜ってやっぱり綺麗だなって感想は皆と同じだった」
　淡い紅色を作った松原さんは、ようやく筆を手に取った。そこそこ大きいキャンバスに白以外の世界が浮かび上がる瞬間。さながら雪解け。松原さんが春を受け入れたかのように、キャンバスが彩られていく。
「社会に出てみたら、案外周囲に敏感にならなくていいのかもなって気づいちゃったから！　それなら自分の好きだったものをもう一度探してみようってなった。そしたらさ、自分にとって思い入れのある花は春の花ばかりだったんだよ！　季節ごとに『こんな思い出があった！』って言うわけじゃないけど、それでも好きなものやことがこの時期に案外身近に存在するってことを実感したら、巡ってくる季節に特別感が芽生えるんだって、納得した」
「好きなものに、ってことですか？」
「うん。花が好きだし、花を見ながら何気に『綺麗ね』って言うのを聞くのが好き。自分以外にも道端にある花を見つめる人がいるんだって、少し心が軽くなる気がするから。現に、君もそうだった」
　そう語りかける松原さんの顔は子供に立ち返ったみたいな無邪気さを纏う。この人は自分の好きなことに対して嘘が無い。関心を持つ話題に純粋に向き合う。あなたのあどけなさが眩しい。一枚収められたらいいのにと、その時の表情を見つめるたびに考えてしまうくらい。それに対し、相変わらず感嘆も感想も言うのが苦手なのが私だ。
「桜とか菜の花とか……。思えば、いろいろありますよね」
「どれも可愛くて安らぎを与えてくれる存在なんだ。最近だと梅の花の時期になってきたんじゃない？　きっと心に残る姿を見せてくれるよ。花はいつでも人間のことを気にも留めずに、ただ存在し続けてくれる。こんなに愛おしい存在って無いと思うんだ」
　梅の花、一月から三月にかけて咲くとされている。白や紅の花弁とほんのりとした甘い香りが、鑑賞の対象となり、芸術の題目となった。馥郁（ふくいく）たる梅の香りとよく言うもので、この高潔な花は称えるに値する存在として人間を魅了し続けてきた。そして今も、梅の花弁と似た色を使って猫を描く私の目の前にいる人に愛されている。
　そういえば、梅も春の花なのかとこの時になって気づく。二月なんてまだまだ冬のイメージが強いのだけれど、旧暦では春真っ只中の時期だ。それらしい季節が来るのは二月の下旬頃からなのか？　で

も、外はまだ白い世界が広がっていて、まだまだ穏やかな陽光が一面を覆う気配は無い。もし、梅の花の匂いを嗅いでみたら、少しは春の甘さを感じられるのかもしれない。そしたら、冷たい風吹く冬の名残も、あともうちょっとだけ楽しむ余裕が出来るはず。

「ちょっと、殿下〜！　ボタンちゃんにちょっかいかけないで〜」

ふざけた声色で松原さんは飼い猫を叱る。ボタンちゃんが窓辺に座って雪を見ている瞬間を描いていたみたいだが、途中で殿下くんが割り込んで前足でちょんとボタンちゃんを突く。ボタンちゃんはそれに返すように、レオくんの身体に前足をベシッと叩きつけた。けれど、すぐにじゃれ合い一緒に雪景色を見始めた。

可愛いと感じるあまり、私は手元のスマートフォンでその姿を撮った。猫たちは我々人間の悩みも呟きも気にしない。彼らには彼らの世界があるのだから当然だけれど、それでも自由な時に人間に関わってくれるから良いのだ。きっと、彼らも春特有の和やかさを知っているはずだから。

「まあいいか、殿下がボタンちゃんを気に入ってるなら。……君もこの姿を収めずにはいられなかった？」

「この仔たちが揃っている姿は癒しなので。それに、ボタンちゃんにも親しい相手がいることが嬉しいんですよ」

「へぇ、そっか」

松原さんは相槌を打つようにして、キャンバスに新たな色を重ねた。黒色っぽい紫色？　いや、私にはよく分からない。けれど、前に見た木の枝の色みたいだ。松原さんは「親しみ」という点に関しては特に触れず、黙々と絵を完成させていく。私たちは友人とはいえない、また別の関係のようだから。

けれど、私は松原さんに対して勝手に信頼を置いている。お互いにグレーゾーンを意識して踏み込まない。インターネット上で知り合う人との通常の距離感。勝手に話すし、勝手に聞く。それだけで成り立つ関係。それだけで良かったのだけれど、私はもう少し近づいてみたかったのだろうか。この人の考えていることを知りたかったのだろうか。松原さんの横顔を見ながら、私は声をかける。

「このタイミングで尋ねるのもなんですけど……」

「答えられる範囲でなら全然大丈夫だよ。それとも、君にしては結構やましい話題？」

「やましい、かどうかは分からないです。ただ、もう梅の花は咲いているんですよね」

「咲いているはずだね、まだ見られてないけど」

「それなら私……」

松原さんの目を見て、はっきりと提案をしたのはこれが初めてだったかもしれない。

「私、あなたと一緒に梅を見に行きたいんです」

キャンバスにはもう外形を保った完璧な猫の絵が映し出されていた。私たちの距離感に対して、なんと仲睦まじいことだろう。

「あぁぁ、寒い……」

「寒がりだね、君は」

「だって、こんな今日、寒くなるなんて……」

「いつもこんな感じだった気がするけど」

なぜ私は、好きでもない雪道の中をひたすらに歩いているのだろうか。私が梅を見に行きたかったから。松原さんと一緒に。コートにマフラーに手袋、らしくもなく耳あてまで着けて、完璧な寒さ対策をしても強風を受け入れてしまう。とても冷たい、突き刺すような寒さが苦手。冬という季節自体は嫌いじゃないけれど、寒さに耐えられる強さを持たない私はその余韻に浸ることなんて夢のまた夢だ。雪国出身を舐めるなと言わんばかりに突き進もうとしたが、雪が身近にあるからといって凍えるのに慣れている訳ではないのだ。

幸い、もう近くに梅の花の鮮やかさが見える。後は前に進むだけ。雪も止んでいるから平気だ。松原さんは意外にも二つ返事で誘いに乗ってくれた。そもそも突拍子もなくそんなお誘いをして調整も大変だろうに、松原さんは良いねと言ってくれたのだ。松原さんは別に誰かと出かけることを好む人ではないのだが。

「一緒に行こう。君の撮る梅の花を見たい」

二週間前、松原さんが承諾してから日々が急速になり、当日までのカウントダウンを急かすようだった。やんわりと断られる気がしていたのに、あそこまですんなりいってしまうなんて。どうも松原さんは梅の花の開花状況が気になるらしく、返事をした後に何処に行くつもりだったのか尋ねてきた。その場所を言うと、松原さんは写真を求めてきた。私がカメラで撮る写真を。いわゆる等価交換だ。私が梅の花の写真を渡す代わりに、松原さんは完成した猫の絵をあげるという。ボタンちゃんと殿下くんの絵、松原さんが描いた絵は儚さもありながらしっかりこの世にその面影を残している。私には見えない、あの人特有の光と色彩が美しくて、愛情をもって育てた植木鉢の温かさに似た特別感がある。

「ほら、もう目の前に梅の花がある。今年も綺麗に咲いたね！　人もいないから、今なら私たちだけで独占できるね」

「おお、圧巻ですね」

ついに梅の前に立つ。濃い紅色、薄い紅色、白色も織り込んで、この並木道は雪景色に僅かな色を添えている。ああ、確かに良い眺めだと心から言える。まだ蕾の状態と半々だが、風が梅の香りを私に擦りつけて、丸い花弁が私の瞼に落ちてくる。松原さんは先へ先へと向かい、落ちてくる花弁を手のひらに受け止めた。雪を掴むよりも容易いと笑いながら。

花をこんな近くで見たのはいつぶりだったか。昔から花は好きだったはずなのに、いつの間にか近くて遠い存在になっていた気がする。でも、この並木道に一歩踏み出した瞬間、凍える冷たさも自分が気にしていた悩みも全てが柔らかな布にくるまるように穏やかになった。甘く鼻を擽る梅の香りが、いつか春が来るのだと思わせてくれた。花はいつでも誰のことを気にかけるのでもなく、ただそこにいてくれるだけだ。確かにその通りだ。

「……ふう」

一通り梅の全てを堪能した気になって、私はカメラを構えた。その時、二羽のメジロが梅の枝にとまり、ちょうど可愛らしい光景を収めることになった。

「良いもの撮れた？」

「ええ、今そこにメジロが止まっていて」

松原さんはそれを聞き、私の隣に近寄った。ギリギリ腕が触れるか触れないかの近さに、思わず胸が

跳ねる。
「ああ、メジロがここに来るなんてね。いい色してるね、この黄緑」
「おしくらまんじゅうみたいになってますね。こんなに至近距離でいても平気だなんて」
「おお、羽繕いしてるね。仲良しさんだ。でもなんだか、色的にうぐいす餅が固まってるみたいに見えてきた！」
　ウグイスと聞くと二月の花札を思い出す。あれに描かれているのはメジロじゃなくてウグイスだけど、彼らは梅の花にはとまってくれないらしい。時期的にまだ鳴き声も聞かせてくれない。春告鳥の声がないと、やはり春らしくないのだろう。少なくとも、私の中では。
「そういえば『梅に鶯』って言葉があったよね。あれって花札かなんかだったっけ？」
「花札の二月の札の中に梅とウグイスが一緒に描かれているものがありますね。種札の一種だったかと思います」
「そうそう。紅色の梅に鮮やかな緑と黄色のウグイスがいるやつ」
　松原さんはメジロを観察しながら納得したように頷く。ふと、私の方を向いてあることを尋ねてきた。
「君はさ～、その花札に描かれているのはウグイスとメジロ、どっちだと思う？」
「えっと、ウグイスだと思っていますが……。ああ、確か本当はメジロ説みたいなのがありましたね」
「そうだけどね、私はそうは思わないから聞いてみた。理由も聞かせてくれない？」
　今までただただそういうものだと思っていたからというのが本音だ。花札の鳥がメジロとはどうしても思えない。ウグイスはあんなに鮮やかな体色では無いから、確かにメジロの方が近そうに見える。逆に、メジロのトレードマークの目の周りの白い模様がないから、メジロでは無いまた別の鳥かもしれない。ああでも、今この瞬間「梅に鶯」でなければダメだと考えてみると、その組み合わせがどうしようもなく美しくて、心をふわりと解してくれるものだったから。きっと穏やかな春の兆しにふさわしい。
「春の始まりに開花する梅と、春告鳥という別名を持つウグイスの鳴き声。この組み合わせが春はもうすぐ目の前に来るのだと知らせてくれるのでしょう」
「それが実際にある光景じゃ無かったとしても？」
「はい。花札の1月の光札にも『松と鶴』というものがあるじゃないですか。実際は松に鶴がとまることは無いけれど、それでもこの組み合わせは長い間定番となり愛されている。それはこの二つが不老長寿の象徴であるから、ですよね？　松はいつまでも青々として神を待つ木とされ、鶴は羽の白さを不老長寿とみなされている。どちらも縁起のいい組み合わせ、新年を迎える者たちのこれからを願うにはうってつけで、なおかつとても素晴らしいものです。『梅に鶯』も『松に鶴』も現実では見ることが叶わない光景でも、それらが示す意味と並び立つ姿を想像するのは、私たちの心に彩りを添えてくれるのかもしれません」
　だから、春の始まりを代表しているとも言える梅とウグイスの組み合わせが良いのだ。雪が眩しくて、梅の蕾はまだ眠っている。ウグイスもいない。いるのは二羽の愛らしいメジロ。けれど、確実に私と松原さんが並ぶこの場所は、一足先の春へ向かっている。それが心地よくてずっと待ち望んでいたように思うのは、きっと梅があるだけじゃない。ウグイスの姿を脳裏に思い起こせば、鳴き声を通じて春の到来を感じられる。そんな気がする。

「へえ～、君ってやっぱり風情あるね。花札の柄をそこまで知っている人、初めてだよ」
思った以上に語ってしまった。私らしくもない。いつも心の中だけ饒舌で、まったく自分の言葉が外に出てこないから、私は想像以上に花やそれに基づく文化が好きだったのかもしれない。
「まあ、その通りだよ。現実がどうとか気にしなくても良いんだ。ウサギが毛皮を剥がれたでもないのにピンク色で表されるように、馴染み深い、相性のいい、素晴らしいと思うものだから、現実的でない組み合わせが現在まで引き継がれてきたんだよ、きっと。昔の人たちが梅とウグイスは春を告げてくれる存在として夢を見てくれたこと、その姿を脳裏に焼き付けるように描いてくれたことがなんだか嬉しいんだよね」
そう言う松原さんの頭に、僅かに梅の枝が当たった。その衝撃でメジロたちは飛び立ってしまったけれど、細い枝に積もっていた雪が崩れ、紅色の花弁が舞った。また頭の中でウグイスの声が反響して、笑う松原さんの顔の近くに梅の花が綻ぶ。この人は本当に春が好きなんだ。好きになったんだ。どうしようもなくその笑顔が頭に焼き付いて、写真に残す勇気すら焦がされてしまった。

「ウグイスの声でも聞こうか」
松原さんは何気なくスマートフォンを取り出し、動画サイトに挙げられているウグイスの声を流しながら梅の並木道を歩いた。少し滑稽な光景だが、本当に春の始まりを身に染みて感じるようだ。
「一回こんな感じで、ウグイスの鳴き声を聞きながら梅を見たことがあるんだ。今思えばラッキーだったのかもしれない。あの頃の梅の景色はもう二度と見られない。風流ってこういうものを言うのかね～？」
「それが春を好きになったきっかけだったんですか？」
「そう。何にも気にせず、ただ自分が見に行きたいと思ったから見に行った。そしたら、思い出が増えた。それだけだけど、それで良かったんだよ。春に対して拗らせていたものも全部頭の片隅に存在している、今でもね」
誰かから見たら些末な思いも、自身にとっては記憶の一部で、切っても切り離せない大事な存在なのだろう。松原さんは過去の自分に対して未練も後悔もあると言っていたが、むしろそれが人間。普遍的で当たり前に感じる感覚を共有できることが私にとって嬉しいことだから、松原さんもそうであって欲しいと願っている。
「写真はどうする？　この後現像しに行く？」
「はい。今日中に渡せたら良いのですが……。松原さんは絵は仕上がりましたか？」
「一応出来てはいるけど、君が見て気になるところあったら修正するよ」
「分かりました。じゃあ……」
何か言いかけようとしたけれど止めた。何を言いたかったのだろう？　松原さんに何を話したかったのか、一瞬にして頭が混乱してしまった。またこうなったと、密かにため息を吐く。
私は写真を撮ることが趣味の一つと言えるが、その趣味を高く評価してくれたのが松原さんだった。松原さんは笑って「記録を残すのは良いことだ」と言った。それが誰に見られることが無かったとしても。その残す形が私は写真で、松原さんが絵。ただそれだけなのだが、私が最初に写真を見せる相手はきっと松原さんなのだ。反応を求めるのもきっとあの人。

「松原さんが見たらなんて言うかな」
花の写真を撮る度にそう考える。松原さんと今日一緒に梅を見に行けたことがとても幸せだった。あの人は人付き合いに積極的な方ではないから、私との誘いも断るものだと思いながら話した。けれど、こうして隣にいることが私の心を緩やかな気持ちにさせてくれる。そう、私はきっと、松原さんの話を聞きたかっただけだ。あの人の声を、あの人の言葉を特等席で味わいたかっただけ。親密な存在とはいえなくても、隣で花を見て話すだけで良かった。
「君が撮る写真は全部穏やかで、そのままそこにいてくれる安心感がある。向上心が無くて、それでもいいと受け入れても大丈夫なんだって言ってくれるみたいでさ。君の世界はこんな感じに見えているんだ」
松原さんに言われたことが未だに心に残っている。この時、私は上手く礼を言えていたか分からない。もっと松原さんに言いたいことがあるはずなのに、いつも心の声で感謝が溢れ出し、外では見栄のためにかえって遠慮してしまう。
会話に出力される情報は、脳に蔓延する思考のほんの一欠片しか放出できない。その一欠片を求めるのが苦手。こうして、イメージだけが完璧になっていく。いっそウグイスのように美しく鳴いている存在か、あるいは何も気にせずに己の姿を見せられる花になってみたいと思うことがある。そうすればきっと、写真ではない心情の伝え方を獲得できるかもしれない。そんな空想を、紅色を視界に掠めたまま浮かべていた。
「幕内さん」
ふっと震えた声が耳に響いた。風の鳴る音と共に、頭の中で反芻していた声の主が私を覗き込んでいる。
「何か考え事でもしてた？　私のことをじっと見てさ」
「……いや、気になることがあって」
「うん？」
「なぜ、松原さんは今日一緒に来てくれたんですか？」
口に出してからやってしまったと感じた。せっかく誘いに応じてくれたのだから、野暮なことを聞かずに「今日は来てくれてありがとう」と言えば良かったのに。ただどうしても、松原さんが私と一緒にいてもいいと思ってくれた理由が知りたかった。
「なぜって？　花を一緒に見に行くのに、そんなに理由は必要ないよ。私は君となら良いかもって率直に思ったんだから」
「それはつまり……？」
「……私のこと、幕内さんからしたら人間関係を気にしない人に見えていると思うんだよね」
「え？」
「そんなことない。実際はそんなことないんだよ」
どう言葉にしていいか分からないような仕草で、それでも私に対する目線は外さなかった。ふと、梅の花弁が一枚はらりと散った。松原さんは頭に落ちるのも気にせずに、私の顔をよく見つめた。
「元から人と深い仲になるのは苦手だし、正直一人が楽だというのは否めない。それが普段から態度に出ていたと思うし。でも、だからこそ、幕内さんを家の中に入れたり、交流を続けるのは自分でもびっくりしたことだったよ。でもきっと単純なこと。初めて話した時、何気ない世間話をしていた時、花を一

緒に見ていた時に少しだけ嬉しそうにしている幕内さんを見て、この人はひょっとして『気が合う』関係になり得る人なのかなって感じた。好きなこと、お気に入りのこと、それが自分と重なったときがパズルのピースをはめたみたいにしっくりきた、のだと思う」

ふっと息を詰めて笑う松原さんの顔は、どこか自分を納得させるように、模索しながら研究を進めるさながら大学教授だ。不明瞭な答えに対して、ようやく解が分かったかと思えば、その目線は不安げだった。

「初めてだったよ。人と話していて、自分と相手の共通の話題で『話が盛り上がる』って感覚を味わったのは。いい大人になってから気づいたのはあれだけど。学生時代に親しい関係になり得る人はそこまでいなかったけれど、本当は身近にいたのかもしれない。私が気づかなかっただけで。」

「……そうだったんですか」

「まあ、私の曖昧な態度のせいで遠慮しているなら気にしなくてもいいよ」

その告白に私の心の内は戸惑いだらけだった。私との関係に松原さんが悩んでいたなんて知らなかった。むしろ、この人は人付き合いに興味がないと勝手に決めつけて、レッテル張りしながら向き合っていたのは私の方ではないか？　けれど、松原さんも勘違いしている。あなたとの会話で遠慮なんてしたことがない。口下手が高じて自分から話題を生み出すことが出来なくて、松原さんの声を聞いているだけで満足していたから。

「でもさ、私は誰かを家に入れたり、絵をあげたりなんて他の人には、よっぽど信頼できる人じゃなきゃしないよ。つまりは、私は幕内さんともっと近づきたいんだと思う」

「それなら、私も遠慮なんてしていませんよ。松原さんと無理に付き合っているとかそんなことありません」

「本当に？」

「でなければ、私も梅を見に行くためだけにあなたを誘いませんよ」

こうして松原さんを真っすぐ見て話すのは、いつでも勇気がいることだった。誰でもないこの人とは良い関係を築きたい。話す言葉も、描いている絵も、ふとした仕草ですら魅力的に見えたから、先の「友人」として親密になりたいと思っていた。頻繁に会うことも、連絡することも無くていい。どちらかが海を見に行こうと衝動に駆られた時に巻き添えになる関係。理想形が過ぎるが、この人となら五感を共有することも楽しめそうだった。

「私は何かを話す時に極端になりがちで……。言いたいことが溢れすぎて何も言えないだけなんです。遠慮して発言を控えている訳じゃなくて、私は松原さんの色々なことに同意して、分かち合いたいと思っています」

「……はは！　そこまで言ってもらえるなんてね」

「すみません、少しだけ熱っぽくなってしまいました……」

「いや？　むしろ嬉しかった。ただあれだね。私たち、お互いに人付き合い初心者だ」

そんなことを言いながら、私たちは紅や白の梅の花弁が散る中で笑い合った。自分たちの本音全てを晒すことはまだ出来ない。どころか親しい者であってもほぼ不可能なことだ。けれど、花を見た時の喜び、何かを創る時に得る高揚感や「今日も飼い猫が可愛くて仕方ないんだ」と言う自慢、共有したい心を揺さぶられる事柄を話し合う時間を求めあうことにした。気楽に、自然なタイミングで話せるように。

後腐れなくいられるような関係であるように。ひとまず、私は思い切って会話をしてみることを学ぶべきなのかもしれない。

「これから先のことだけど、花札に描かれている景色を見に行こう。三月になったら桜を見に行くの。酒は飲んでも飲まなくてもいいけど、満開になった桜の色を眺めていよう」

「それなら、松原さんに桜並木の絵を描いてもらいたいですね。猪鹿蝶も五光も、素晴らしい作品となるでしょうし。そしたら……」

「そしたら？」

「花を見ながら積もる話でもしましょうか。最低でも一か月に一度会えるなら、好きな物事に対する熱量はいつまでも残るはずなので」

近々花札で勝負しようと約束して、私たちは梅の並木道を後にした。その後は猫の話、絵の具の話、行きたい場所の話、私たちが共有するに相応しい好きな事柄を話していた。梅の香りがまだ鼻に残るような気がして、脳内でまたふっとウグイスの鳴き声がした。もうすぐ春が来る。世界の気候が変わるのと同じく、私たちの関係も少しの変化を迎える。花札に刻まれている花を辿る、一年後の私たちを想像した。隣で歩く松原さんの笑顔と、少し紅色に染まった頬を肌に感じながら。

奥付

奥付

奥付

案山子　２０２４夏号
https://puboo.jp/books/page/write/135031

著者：新潟大学文芸部
https://puboo.jp/users/sindaibungeibu

電子書籍プラットフォーム：パブー（https://puboo.jp/）
運営会社：デザインエッグ株式会社

案山子二〇二四　冬

著　者　　新潟大学文芸部

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社